



特217

821

音福の督基

著里篤林小



始



特217
821



小林篤里著

基督の福音

東京出版通信社發行



序

「たとひ一日に一時間なり二時間なりとも俗務より退き、身體の喧噪を脱れ、以て神に祈禱を捧げ、以て神と交通することを得ば、此一二時間たるや一日中の最も神聖にして且最も幸福なる時間である。神自身が編在なる如く、神の聲も亦編在である。故に吾人、若し神の聲を聴かうとならば、神は吾人の身體より身内まで。吾人の靈魂に對して談話をさるゝであらう。其の談話を聴くと聴かぬとは、それは吾人の隨意であるが、只これを聴くことを妨ぐるものは外界の喧囂と心裡の煩悶との二者である、この二者を避け、心を沈靜にして、神の聖音に接しやうとすれば、神は必ず吾人に語るのである。吾人は一日に數時間を費して神と交通せねばならぬ」とはエドワード・ボービ

ア・ブーセーの言である。本書は聖書に顯はれたる箴言警句の中より、現代人の思想と生活に適すべきものを選択したのである。近時人道主義を提唱する者漸く多きを加へ、これに關する論議も亦盛ならんとする時、基督の教旨を収録し、吾人日常の修養に資せんと試みたのである。

鶯里山人

基督の福音

小林鶯里編

基督の福音

【一】 若し全身目ならば、聞くところは何所ぞや。若し全身耳ならば、嗅ぐところは何所ぞや。それ神は心のまゝに肢を各々軀に置き給へり。若し皆一つの肢ならば軀は何所ぞや。肢は多くあれども軀は一つなり。目は手に我なんぢに用なしといふを得ず。また頭も足に我なんぢに用なしといふを得ず。軀のうち尤も弱しと見ゆる肢は却つて無かるべからざる物なり。軀のうち尊からずと思ふ所に物を纏ひて、我等殊に之を尊ぶ。之によりて我等の醜き所はすぐれて美しくなるなり。我等の美しき所は心を用ゐるに及ばず。神はその劣れる所に殊に尊きを加へて軀を調へ給へり。

この軀のうち分るゝことなく、もろもろの肢たがひに相顧み扶けん爲なり。若し一つの肢苦まば總ての肢ともに苦み、一つの肢尊ばれなばすべての肢ともに喜ぶなり。

(哥林多前書第十二章自第十七節至第二十六節)

【二】 彼等は晝も酒食を樂とす。染なり、瑕なり、爾曹と共に筵席に與るときその謊譎を樂とせり。彼等目に淫婦を満し、罪を犯して止めず。心の堅からざる者を感し、その心貪婪に慣る、これ詛はるべき子供等なり。彼等正しき道を離れて迷に入り、ボソロの子バラムの道に従へり。バラムは不義の利を貪りし者なり。彼の不法の爲に責めらる、語ることを能はざる驢馬人の聲をなして豫言者の狂を止めたり。この輩は水なき井なり、嵐に追はるゝ雲なり。黒き闇彼等の爲に限りなく残り。そは彼等の誇りたる空しき詞を語り肉慾と淫亂をもてかの迷へる者、中より辛うじて逃れたる者を誘へばなり。また彼等は之に自由を與ふると稱ふれども、自ら淪亡の下部たり。そは勝たるゝ者は勝つ者の下部たればなり。

【三】 我まことに爾曹に告げん。おほよそ爾曹が地に於て繋ぐことは天に於ても繋ぎ、爾曹が地に於て釋くことは天に於ても釋くべし。我また爾曹に告げん。若し爾曹のうち二人の者地に於て心を合せ、何事にても求めば天にいます吾父は彼等の爲に之を爲し給ふべし。(馬太傳第十八章自第十八節至第十九節)

(彼得後書第二章自第十三節至第十九節)

【四】 クリアよ、我いま爾に勸む、互に相愛すべし。こは新しき誠を書き贈るにあらず、すなはち始より我等が持てる處のものなり。我等彼の誠に従ひてあゆむは是すなはち愛なり。なんぢらが始より聞きし如く、愛にあゆむは是すなはち誠なり。

(約翰第二書自第五節至第六節)

【五】 噫エルサレムよ、エルサレムよ、豫言者を殺し爾に遣はされし者を石にて撃てる者よ、牝鶏の雛を翼の下に集むる如く我なんぢらの子供を集めんとせしこと幾度ぞや。なんぢらは好まず、視よ、なんぢらの家は墟となりて遺さるべし。まこと

に我なんぢらに告げん。主の名によりて来るものは、さいはひなりと爾曹言はん時
至るまでは我を見ざるべし。(路加傳第十三章自第三十四節至第三十五節)

【六】 また若き者に勸む、なんぢら長老に従へ、且たがひに相從ひて謙遜を着よ、
それ神は驕る者を拒ぎて、へりくだる者に恵を興へ給ふなり。この故になんぢらの
神の大能の手の下に己を卑くすべし、時至らば、彼なんぢらを高くせん。

(彼得前書第五章自第五節至第六節)

【七】 それ天國は朝はやく出で、葡萄酒に働く者を雇ふ主人の如し。働く者には
一日に銀一枚を興へんとて約束をなし、彼等を葡萄酒に遣せり。また九時ごろ出で
て巷にむなしく立てる者を見て爾曹も葡萄酒にゆけ、相當の價を興へんと彼等に言
ひければ即ち往けり。また十二時と三時ごろ出でて前の如くなせり、五時ごろ出で
てまた外の立てる者に遇ひて言ひけるは、何ゆゑ終日茲にむなしく立つや。これに
答へて言ひけるは、我等を雇ふ者なきによりてなり。彼等に言ひけるは爾曹も葡萄

島に行け相當の價を得べし。日暮るゝとき葡萄酒の主人その家司に言ひけるは働きたる者共を呼びて後に雇へる者を始とし先の者にまで價を拂へよ。五時ごろに雇はれし者共きたりて銀一枚づつを受けたり。先の者共きたりて我等は多く受くるならんと思ひしにまた銀一枚づつを受く、これを受けて主人を恨み謚さけるは、この後の者の働きたるは一時ばかりなるに、終日 苦を負ひ暑さにあへる我等と等しく之をなせり。主人その一人に答へて言ひけるは、友よ我なんぢに不義をせず。なんぢと銀一枚の約束をなしたるにあらざるや、なんぢのものを取りて往け、われまたこの後の者にもなんぢの如く興ふべし。我物を以て我思ふ如くなすはよからずや、わが善きによりてなんぢの目悪しきか、斯くの如く後の者は先に、先の者は後になるべし。それ呼ばるゝ者は多しと雖も選ばるゝ者は少し。

(馬太傳第二十章自第一節至第十六節)

【八】 それ人眞の教を容れず、耳を喜ばしむる言を好み、その私慾に従ひて己が爲

に師を増し加ふる時來らん。彼等耳を眞理より背け怪しき話に向ふべし。されど爾すべての事に慎み苦難を忍びて、傳道者の工をなしなんちの職を盡せ。

(提摩太後書第四章自第三節自第五節)

【九】愛する者よ、なんちが靈魂の盛なるが如く、なんち總ての事につきて盛に、また健かならんことを我ねがふ。兄弟來りてなんちが眞理を持つること即ちなんちが眞理に歩むことを證したれば、われ甚だ喜べり。我子達の眞理に歩むを聞くに勝れり大いなる喜は我になし。(約翰第三書自第二節至第四節)

【一〇】すべて我がこの詞を聽きて、行ふ者を磐の上に家を建てたる賢き人に譬へん。雨降り大水いで風吹きて、その家を撞てども倒ふることなし。これ磐を礎となしたればなり。すべて我がこの詞を聽きて行はざる者を砂の上に家を建てたる愚なる人に譬へん。雨降り大水いで風吹きてその家を撞てば終には倒れてその傾覆おほいなり。(馬太傳第七章自第二十四節至第二十七節)

【一一】イエスマた人の恒に祈禱して氣落すまじき爲に譬を彼等に語りけるは、ある町に神を畏れず、人を敬はざる裁判人ありけるが、ある町に寡女ありて、我を我が仇より救ひたまへと言ひて彼に至りしに、彼久しく肯はざりしかど、その後心中に思ひけるは、我神を畏れず人をも敬はざれど、この寡女われを煩せば、彼女の絶えず來りて我を聒さざる爲に之を救はん。主いひけるは不義なる裁判人の言ひしことを聽け、まして神は晝夜祈るところの選びたる者を、久しく忍ぶとも終に救はざらんや。(路加傳第十八章自第一節至項七節)

【一二】信仰の弱き者を受けよ、されどその思ふところを詰るなかれ、ある人は總ての物を食ふべしと信じ、ある人は弱くして唯野菜を食へり、食ふ者は食はざる者をかろしむることなかれ、食はざる者は食ふ者を捌きするなかれ、神これを受くればなり。(羅馬書第十四章自第一節至第三節)

【一三】兄弟よ、我儕肉の爲に負ふところありて肉に従ひ仕ふる者にあらず。若し

肉に従ひ仕へなば死ぬべし。若し靈によりて體の働きを殺さば生くべし。

(羅馬書第八章自第十二節至第十三節)

【二四】 爾の首を指して誓ふ勿れ。そは一筋の髪だに白くする能はざればなり。爾曹ただ然り然り否々と言へ、それより過ぐるは惡より出づるなり。

(馬太傳第五章自第三十六節至第三十七節)

【二五】 この故に爾曹すべての怨恨、すべての詭譎、また偽善、怨嫉、およびすべてのの謗言を棄て、今生れし嬰兒の乳を慕ふ如く爾曹心を養ふ眞の乳を慕ふべし。これによりて爾曹育ち救ひに至らん。(彼得前書第二章自第一節至第二節)

【二六】 凡そ世にあるもの、即ち肉體の慾、眼の慾、また勢より起る驕傲、それらは皆父より出づるにあらず、世より出づるなり。この世とその慾とは過ぐるものにて、神の旨を行ふものは限りなく止るなり。(約翰第一書第二章自第十六節至第十七節)

【二七】 イエス教へをなせる時彼等に言ひけるは、長き衣を着て歩き、巷にて人の

挨拶會堂の高坐筵席の上座を好み、また寡婦の家を呑み偽りて長き祈をする學者を謹めよ。彼等の捌かるゝこと尤も重し。(馬可傳第十二章自第三十八節至第四十節)

【二八】 シロアムの塔たふれて壓殺されて十八人は、ユルサレムに住めるすべての人々よりも勝れて罪ある者と思ふや、われなんぢらに告げん、然らずなんぢら悔ひ改めずば皆おなじく亡さるべし。(路加傳第十三章自第四節至第五節)

【二九】 わが兄弟よ救爾のうち、あるひは眞の道より迷へる者あらんに、誰か之を引返さばこの人知るべし。罪人をその迷へる道より引返すは、乃ちその靈魂を死より救ひかつ多くの罪を掩ふことを。(雅各書第五章自第十九節至第二十節)

【三〇】 酒に酔ふことなかれ、これをなすは放蕩なり、よろしく靈に満さるべし。たがひに詩と歌と靈に感じて作れる賦とを以て語りあひ、また歌ひて爾曹の心に主を讚美すべし。(以弗所書第五章自第十八節至第十九節)

【三一】 知識は人をほこらしむ、されど愛は徳を建つるものなり。若しみづから良

くものを知ると思ふ者は、未だその知るべき程をも知らざるものなり。

(哥林多前書第八章自第一節至第二節)

【二二】 われら神を愛すと言ひて、その兄弟を憎むはこれ 僞人なり。既に見るところの兄弟を愛せずして、未だ見ざる神を如何で愛せんや。神を愛する者亦その兄弟をも愛すべし。その誠は儕我彼より授けられたり。

(約翰第一書第四章自第二十節至第二十一節)

【二三】 われなんぢらを受する如く、なんぢらも亦たがひに愛すべし。これ我が誠なり。人その友の爲に己の命を棄つるは、これより大いなる愛はなし。

(約翰傳第十五章自第十二節至第十三節)

【二四】 我儕もし神を愛してその誠を守らば、これによりて我儕神の子供を受すると知る。神の誠を守るは、是すなはち神を受するなり、その誠は難からず。

(約翰傳第一書第五章第二節至第三節)

【二五】 夫たる者よ、爾曹も妻をあつかふこと弱き器の如くし、理に従ひてこれと共にをり、これを救ふこと生命の恵み嗣ぐ者の如くすべし。是なんぢらの祈禱の阻礙なからん爲なり。(彼得前書第三章第七節)

【二六】 おほよそその妻を出して外の女を娶る者は、その妻に對して姦淫を行ふなり。また女もしその夫を出して外に嫁がば、その女も姦淫を行ふなり。

(馬可傳第十章第十一節至第十二節)

【二七】 古の人に告げて姦淫すること勿れと言へることあるは、爾曹が聞きし所なり。されど我なんぢに告げん。凡そ女を見て色情を起す者は、心の中すでに姦淫したるなり。若し右の眼なんぢを罪に陥さば抉出して之を棄てよ、そは五體の一を失ふは全身を地獄に投げ入れらるゝよりは勝れり。もし右の手なんぢを罪に陥さば之を斷りて棄てよ、そは五體の一を失ふは全身を地獄に投げ入れらるゝよりは勝れり。(馬太傳第五章自第二十七節至第三十節)

【二八】 心の貧しき者は幸なり。天國は即ちその人の物なればなり。悲む者は幸なり。その人は安慰を得べければなり。柔和なる者は幸なり、その人は地を嗣ぐことを得べければなり。饑え渴く如く義を慕ふものは幸なり。その人は飽くことを得べければなり。矜恤ある者は幸なり、その人は矜恤を得べければ也。心の清き者は幸なり。その人は神を見ることを得べければなり。和平を求むる者は幸なり、その人は神の子と稱へらる可ければなり。(馬太傳第五章自第三節至第九節)

【二九】 わが兄弟よ、世なんぢらを憎むとも駭くこと勿れ、われら兄弟を愛するに依り、すでに死を出でて生に入りしことを自ら知る。兄弟を愛せざる者は死の中に居る、凡そ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり。凡そ人を殺す者は窮なき生命その裏にをることなし、こは爾曹の知るところなり。(約翰第一書第三章自第十三節至第十五節)

【三〇】 食物によりて神の成せるところを毀つこと勿れ。すべての物みな清し、然れども之を食ふて人を礙かする者には惡とならん。肉を食ふ、酒を飲む何事によら

ず爾の兄弟を倒し、或は礙かせ、或は懦弱くするは宜からざるなり。

(羅馬書第十四章自第十九節至第二十一節)

【三一】 總てのことつぶやくことなく、また争ふこと無くして作ふべし。これ爾曹が玷なく雜なく神の子となり、曲れる邪なる時代にありて責むべきところなからん爲なり。爾曹はこの時代にありて光の如く世に顯はれ、生命のことばを保てり。

(腓立比書第二章自第十四節至第十六節)

【三二】 夫われは馬を己に従はせんとして、その口に轡を置く時はその全體を馭すべし。舟も亦その形は大きく、且烈しき風に追はるゝとも、小さき舵を以て舵子の心の隨に之を廻すなり。斯くの如く舌も亦小さきものにして誇ること大いなり。視よ、僅かの火いかに大いなる林を燃すを、舌は即ち火、すなはち惡の世界なり。舌は百體の中に備りありて全體を汚し、また全世界を燃すなり。舌の火は地獄より燃え出づ、その様々の獸、鳥、昆蟲、海にあるもの、皆の制を受く、また既に人に制

せられたり。されど人たれも舌を制し能はず、乃ち抑へがたき惡にして死の毒を充てるものなり。(雅各書第三章自第三節至第八節)

【三三】 爾曹みな光の子ども晝の子どもなり。われら夜につけるもの暗きにつける者にあらず。されば我儕外の人の眠るが如く眠ることもせず醒めて慎むべし。酔る者は夜ねむり、酒に酔ふ者は夜ゑふなり、晝につける我儕は信と愛の胸當をき救ひの望を胃として慎むべし。(帖撒羅尼迦前書第五章自第五節至第八節)

【三四】 昔民の中に偽の豫言者ありき、その如く爾曹の中にも偽の師出でん。彼等は淪亡に至る異端を傳へ、且おのれを贖ふ主を主とせずして速かなる淪亡を自ら取るべし。また多くの人かれらの好色に効はん。眞の道これによりて謗言を受けん。かれら貪る心に由りて造詞を設け、爾曹より利を取らんとす。彼等の審判は昔より定めあれば遅からじ、彼等の淪亡は寝ねず。(彼得後書第二章自第一節至第三節)

【三五】 我が愛する兄弟よ、人おのゝ聴くことを速かにして語ることを遅くし、

怒ることを遅くすべし。そは人の怒は神の義を行ふ事をせざればなり。之れは諸の汚穢と多くの邪惡を棄て柔和を以て、爾曹その心に植ゑたる所の靈魂を救ひ得る詞を受くべし。(耶各書第一章自第十九節第二十一節)

【三六】 瞽者たる相手よ、爾曹は環を漉出して駱駝を呑むものなり。あゝ禍なるかな。偽善なる學者とパリサイの人よ、爾曹杯と盤の外を清くして内には貪欲と淫欲とを充せり。瞽者なるパリサイの人よ、爾曹まづ杯と盤との内とを清くせよ、さればその外も亦きよかるべし。噫なんぢら禍なるかな、偽善なる學者とパリサイの人よ、爾曹は白く塗りたる墓に似たり。外は美しく見ゆれども内は骸骨と様様の汚穢にて充つ、斯くの如く爾曹もまた外は正しく人に見ゆれども内は偽善と不法にて充つ。(馬太傳第二十三章自第二十四節至第二十八節)

【三七】 神は心の破碎たるものを醫し、其傷をつゝみ給ふ。神はもろゝの星をかぞへて凡て之に名を與へ給ふ。(詩篇百四十七の三、四)

【三八】 神はその僕等の靈魂を購ひ給ふ、神に依頼む者は一人だに壊滅せらるゝことなかるべし。(詩篇三十四の二十二)

【三九】 汝等將に受けんとする苦を懼るゝ勿れ……爾曹十日の間患難を受べし、爾死に至るまで忠信なれ、然らば我生命の冠を爾に賜へん。(約翰黙示錄二の十)

【四〇】 神の汝に要めたまふ事は、唯正義を行ひ、憐憫を愛し、謙遜して汝の神と共に歩む事ならずや。(米迦書六の八)

【四一】 汝ち生命の道を我に示したまはん。汝の前には充足る喜びあり、汝の右にはもろくの快樂とこしへにあり。(詩篇十六の十一)

【四二】 凡の懲治今は悦しからず、反て悲と意はる。然ど後之に由て鍛練する者は平安なる果を結ばせり。(希、伯來書十二の十一)

【四三】 あゝ我父よ、若し叶はば此杯を我より離ち給へ、然ど我心の從を成んとするに非ず聖旨に任せ給へ。(馬太傳二十六の三十九)

【四四】 神の榮の權威に循ひて、賜ふもろくの能力を得て強くなり、凡の事よこびて恒忍かつ久耐ん。(哥羅西書一の十一)

【四五】 凡て汝に依頼む者を喜ばせ給へ……名を愛する者にも汝によりて歡喜を得しめ給へ。(詩篇五の十一)

【四六】 我れ一事を神にこへり。我れ之を求む、我れ神の美しきを仰ぎ、其宮を見んが爲に我世にあらん限りは、神の家に住はんことを願ふなれ。(詩篇二十七の四)

【四七】 智者いづくにある、學者いづくにある、此世の論者いづくにある。神はこの世の智慧をして愚かならしむるにあらずや。世人は己の智慧を恃みて神を知らずこれ神の智慧に適へるなり。この故に神は傳道の愚かなるを以て信ずる者を救ふを善しとせり。(哥林多前書第二十節至第二十一節)

【四八】 我なんちの涙を思うて爾を見んことを願ふ、これ歡喜を我に滿しめんためなり。我なんちの偽なき信仰を思ふ、斯くの如き信仰、前になんちの祖母ロイス、ま

たなんぢの母ユニケにあり、今なんぢにもあることを信ずるなり。この故に、我なんぢをして我が按手によりてなんぢが受けし神の賜物を再び盛にせんことを思はしむ。そは神の我等に賜へる靈は臆する靈にあらず、力と愛と謹の靈なればなり。

(提摩太後書第一章自第四節至第七節)

【四九】 天國は燈を執りて花婿を迎へに出づる十人の娘になぞらふべし。その中五人は賢く、五人は愚なり、愚なる者はその燈をとるに油を携へざりしが、賢き者はその燈とともに油を器に携へたり、花婿遅かりければ皆假寐して眠れり、夜なかばに叫びて花婿來りぬ。出でて迎へよと叫ぶ聲ありければ、この娘ども皆起きてその燈を整へたるに、愚なる者賢き者に言ひけるは、我等の燈消えんとす願はくばなんぢらの油を我等に分け與へよ。賢き者答へて言ひけるは我等となんぢとに恐らくは足るまじし、なんぢら賣る者に往きて己がために買へ。彼女等買はんとて往きしとき、花婿きたりければ既に整へたる者はこれと偕に婚筵に入りしかば門は閉ぢら

れたり。斯くて後その外の娘きたりて言ひけるは、主よ我等のために開きたまへ、答へて我まことに告げん、我は爾曹を知らずと言へり、されば愈ち守りて守れなんぢらその日その時を知らざればなり。(馬太傳第二十五章自第一節至第十三節)

【五〇】 肉體の父はその心に任せて暫く我等を懲しむ。されど靈魂の父は我等に益を得せしめて、その聖潔にあづからせんが爲、懲らしこることをなす、すべての懲治今は喜ばしからず、却つて悲しと思はる。されど後これによりて鍛練する者には義の穩かなる果を結ばせり。この故になんぢら疲へたる手、弱りたる膝をすこやかにせよ。足蹇へたる者の迷ふことなく痊されんがため、なんぢらの足に直なる徑を備ふべし。(希伯來書第十二章自第十節至第十三節)

【五一】 わが愛する者よ、その仇を報ゆること勿れ。退きて主の怒を待て、そは記して主の言ひ給ひけるは、仇を返すは我にあり、我かならず之を報ひんとあればなり、是故になんぢの仇もし飢ゑなば之を食はせ、若し渴かば之を飲せよ、なんぢ斯

くするは熱き火を彼の首に積むなり。(羅馬書第十二章自第十九節至第二十節)

【五二】 汝の靈魂の欲するものをも、飢たるものにほどこし、苦しむものの心を満足らしめば汝の光くらきにてりいで、汝の闇は晝の如くならん。神は常に汝を導き給まはん。(以賽亞書五十八の十、十一)

【五三】 我儕いま神の子たり、後いかん。未だ露れず、其現れん時には必ず神に肖んことを知る。そは我儕その眞状を見るべければ也。(約翰傳第一書三の二)

【五四】 至高く、至上なる永遠に住めるもの、聖者と名づくるもの、如此いひ給ふ。我は高き所聖き所に住み、亦心碎けて謙遜る者と共に住み、謙遜る者の靈を活し、碎けたる者の心を活す。(以賽亞書五十七の十五)

【五五】 汝に依頼む者を右手をもて、仇する者より救ひ給ふ者よ、願くば汝の妙なる仁慈をあらはしたまへ。(詩篇十七の七)

【五六】 我の曙の翼をかり、海のはてに住むとも、彼處にて尙ほ汝の手我をみらび

き、汝の右の手われをたもち給はん。(詩篇百三十九の十、十一)

【五七】 従前より録されたる所は、皆われらに教へて聖書の忍耐と安慰との言に藉て、望を得させん爲に録せる也。(羅馬書十五の四)

【五八】 兄弟よ、我儕なんぢらに勸む、妄行者を戒め、氣餒者を慰め、懦弱者を扶け、衆ての人に伺て忍ぶべし。(帖撒羅迦尼前書五の十四)

【五九】 神よ願くば、我を探りて我心を知り、我を驗て我もろくの思念を知りたまへ、願はくば我によこしまなる途の有りや無しやを見て、我を永遠のみちに導きたまへ。(詩篇百三十九の二十三、二十四)

【六〇】 堅く立て懼るる事なかるべし、則ち汝が憂愁を忘れん。汝の之を憶ゆることは、流れ去りし水の如くならん。(約百記十一の十五、十六)

【六一】 我が聲を聞け、我は汝の神なり、汝は我が民たるべし。汝は我が汝に命じたる凡ての途を歩め。(詩篇七十八の一)

【六二】 神は我をいこひの水濱に伴ひ給ふ。神は我靈魂を活し、名のゆるを以て我を正しき路にみちびき給ふ。(詩篇二十三の二十三)

【六三】 これは我儕の神なり、われら俟望めり、彼われらを救ひたまはん。是れ神なり、我儕まことのぞめり、我儕そのすくひを歡び樂しむべし。(以賽亞書五十二の九)

【六四】 神もし我れ汝を悦ばすと、斯くいひ給はゞ視よ、我は此に在り、此目に善と見ゆる所を我になしたまへ。(撒母耳後書十五の二十六)

【六五】 爾曹もし聖書に載る所の己の如く、爾の隣人を愛すべしと云へる貴き法を守らば、其の行ふところ善し。(雅各書二の八)

【六六】 わが兄弟よ、若なんぢら各様の誘試に遇はゞ、之を喜ぶべき事とすべし。蓋なんぢらの受る信仰の試みは、爾曹をして忍耐を生ぜしむるを知らばなり。(雅各書一の二三)

【六七】 然らば我儕たがひに審判すること勿れ。寧ろ兄弟の前に絆跌、あるひは

妨礙を置ざらんことを定むべし。(羅馬書十四の十三)

【六八】 然らば爾曹惡しき者ながら、善賜を其子に與ふるを知る。まして天に在す爾曹の父は求むる者に善物を與へざらん。(馬太傳七の十一)

【六九】 われ此事を爾曹に語りしは、汝曹をして我に在て平安を得させんが爲なり。爾曹世に在ては患難を受けん、然ど懼るる勿れ、我すでに世に勝てり。(約翰傳十六の三十三)

【七〇】 ヤコブよ、なんぢを創造せる神いま此如いひたまふ。イスラエルよ、汝をつくれるもの今かくいひ給ふ。恐るる勿れ、我なんぢを贖へり。我なんぢの名をよべり。汝はわが有なり。(以賽亞書四十三の二)

【七一】 愛する者よ、我儕互に相愛すべし、愛は神より出れば也。おほよそ愛ある者は神に由て生れ且神を識るなり。(約翰傳第一書四の七)

【七二】 末の世に艱の日きたらん。爾このことを知れ、その日さらば人はただ己を

愛し、貪婪、矜誇、驕傲、詭詐、不孝、恩を忘れ、不潔、不情、怨を解かず、誘寵
欲を縱まゝにし、殘刻、善を好まず友を賣り、放肆、自負、神よりも佚樂を愛する
ことをせん。彼等は敬虔の貌あれど、實は敬虔の徳を棄つ、なんぢ斯くの如き者を
避くべし。(提摩太後書第三章自第一節至第五節)

【七三】 なんぢ兄弟の目にある塵を見て、己の目にある梁木を知らざるは何ぞや。
如何で己の目にある梁木を見ずして、兄弟に向ひ兄弟よ、爾の目にある塵を我に取
らせよと云ふことを得んや。偽善者よ、先づおのれの目より梁木をとれ、さらば兄
弟の目にある塵を取ること明かに見ゆべし。(路加傳第六章自第四十一節至第四十二節)

【七四】 誠に實に我なんぢらに告げん。爾曹は歎き悲み世は喜ぶべし。爾曹憂ふる
ならん。されどその憂は變りて喜びとなるべし。女子を産まんとする時は憂ふ、そ
の時至るによりてなり、されど己に生めばもとの苦みを忘る、世に人の生れたる喜
樂によりてなり。(約翰傳第十六章自第二十節至第二十一節)

【七五】 なんぢら天空の鳥を見よ、蒔くことなく、刈ることを爲す倉に蓄ふること
なし。然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり。爾曹は之よりも大いに勝るものなら
ずや、爾曹のうち誰かよく思ひ煩ひてその生命を寸陰も延べ得んや、また何故に衣
のことを思ひ煩ふや、野の百合花は如何にして育つかを思ひ、つとめず紡がざるな
り、われ爾曹に告げん。ソロモンの榮華の極みの時だにも、その装この花の一つに
若かざりき。神は今日野にありて明日爐に投げ入れらるる草をも斯くよそはせ給へ
ば、まして爾曹をや。嗚呼信仰うすき者よ、さらば何を食ひ何を飲み何を着んとて
思ひ煩ふ勿れ。(馬太傳第六章自第二十六節至第三十節)

【七六】 怒りて罪を犯すこと勿れ、怒りて日の入るまでに至ること勿れ、惡魔に處
を得さすこと勿れ。竊をするものまた竊する勿れ。寧ろ貧しき者に施さんために嘔
みて手づから善き工をなすべし。總て汚れたる詞を爾曹の口より出すこと勿れ、唯
時に従ひて人の徳を建つべき善き事をいひ、聽く者をして益あらしむべし。

(以弗所書第四章自第二十六節至第二十九節)

【七七】 婦女はすべてのこと従ひて靜かに道を學ぶべし。われ婦女に教を施すことと、男の上に權を執ることを許さず、只靜かにすべし。そはアダムは前に造られ、イブは後に造られたればなり、アダムは惑されざりしなり。婦女は惑されて罪に陥れり、然れども彼女もし信仰と愛と潔と謹にをるならば、子を生むことによりて救ひを得べし。(提摩大前書第二章自第十一節至第十五節)

【七八】 富める者はその卑くせらるる事を喜樂とせよ、そは花の如く逝くべければなり。それ日出で、熱し、草を枯せばそは花落ち、その美しき姿消ゆ、富める者も亦かくの如くそのなすところ半にして己まづ亡びん。(雅各書第一章自第十節至第十一節)

【七九】 小人よ、人に惑さるること勿れ、義を行ふ者は義人なり、即ち主の義なるが如し。罪を犯す者は惡魔より出づ、そは惡魔は始より罪を犯せばなり。神の子の顯るるは惡魔の仕業を毀たんが爲なり。凡そ神によりて生るる者は罪を犯さず、そ

は神の種その衷にあるによる。彼亦罪を犯すこと能はず、そは神によりて生るればなり。是によりて神の子と惡魔の子とは明かに顯る。凡そ義を行はずその兄弟を愛せざる者は皆神より出でしにあらず。(約翰第一書第三章自第七節至第十節)

【八〇】 爾曹富める者は禍なるかな、既に安樂を受くればなり。爾曹飽ける者は禍なるかな、饑ゑんとすればなり。爾曹いま笑ふ者は禍なるかな、悲み哭かんとすればなり。すべての人なんぢらを譽めなば爾曹禍なるかな、その先祖が偽の豫言者になりたりしも斯くの如し。(路加傳第六章自第二十四節至第二十六節)

【八一】 また點汚なく皺なく、凡て此の如き類なく、聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建ん爲なり。(以弗所書五の二十七)

【八二】 爾曹かれに來り、活石の如く建られて靈の室となり、亦潔き祭司と爲り、基督に由て神に悦ばるる靈の祭物を献べし。(彼得前書二の五)

【八三】 また信ずる爾曹に對して行ひ給ふ。神の能の極て大なることを知らしめ給

はんことを願ふ。爾曹の信ずる神の大なる能の感動に由るなり。(以弗所書一の十九)

【八四】 泉の源は、一つ穴より甘き水と苦き水を共に出さんや。わが兄弟よ、無花果の樹橄欖の果を結び、あるひは葡萄の樹無花果の果を結ぶことを得んや。斯くの如く泉の源鹹水と淡水を共に出すこと能はず。(雅各書第三章自第十一節至第十二節)

【八五】 兩曹は世の光なり、山の上に建てられたる城は隠るることを得ず。燈を燃して斗の下に置く者なし、燭臺に置きて家に在るすべての物を照らさん。(馬太傳第五章自第十四節至第十五節)

(馬太傳第五章自第十四節至第十五節)

【八六】 それ神の怒は、不義をもて眞理を抑ふる人々のすべての不虔不義に向ひて天より顯る、そは人の知るべき所の事柄は、人に顯明にして既に神これを人に顯し給へばなり。(羅馬書第一章自第十八節至第十九節)

【八七】 聖徒たるに適ふ如く、奸姪および總ての汚れたること、また貪ることを互に言ふことだにすること勿れ。淫辭と浮きたる言と戯れ言を言ふ勿れ。これ宜しか

らざる事なり、寧ろ謝することをすべし。(以弗所書第五章自第三節至第四節)

【八八】 爾曹已に古き人と、その行を脱ぎて新しき人を着たれば、たがひに詐をいふなかれ。この新らしき人は愈々新らしくなり、人を造りし者の像に従ひて知識に至るなり。(哥羅西書第三章自第九節至第十節)

【八九】 それ己の如く、爾の隣を愛すべしと言へる、此の一つの詞すべての律法を全ふするなり。なんぢら慎めよ、若したがひに噬み食はば恐らくはたがひに滅されん。(加拉太書第五章自第十四節至第十五節)

【九〇】 蝨くひ銹びくさり、盗人うがちて竊むところの地に寶を蓄ふること勿れ。蝨くひ銹びくさり、盗人穿ちて竊まざるところの天に寶を蓄ふべし。そはなんぢらの寶のあるところに心も亦あるべければなり。(馬太傳第六章自第十九節至第二十一節)

【九一】 われ言ふ、なんぢら靈によりて歩むべし。さらば肉の慾を成すことなからん。そは肉の願は靈に逆ひ、靈の願は肉に逆ひ、この二つのもの互に相悖る。この

故に爾曹好む所の事を爲すを得ず。(加拉太書第五章自第十六節至第十七節)

【九二】 爾曹もし熱心に善を行はば、誰か爾曹を害はん乎。たとひ正しき事の爲に苦しめらるるとも、爾曹は幸なる者なり。人の爾曹を威すを畏る勿れ、また憂ふる勿れ。(彼得前書第三章自第十三節至第十四節)

【九三】 爾曹の衷にある望の緣由を問ふ。人には柔和と畏懼を以て答へをなさんことを備へよ。かつ答ふる時は善き良心に従ふべし。これ爾曹を惡を行ふ者と誣ひ、爾曹がキリストにあつて行ふ善き行を誘ふ者の自ら愧ぢん爲なり。若し爾曹が善を行ふによりて、苦みを受くること神の心ならば、惡を行ふによりて苦みを受くるに勝れり。(彼得前書第三章自第十五節至第十七節)

【九四】 爾曹その肢體を獻げて、汚穢と惡の僕となり惡に至りし如く、今またその肢體をささげて義の僕となりて、聖潔に至るべし。そは爾曹罪の僕なりし時には義に事へざればなり。爾曹いま耻づるところのこのことを行ひしその時、何の實を得たり

しや、これらのことの果は死なり。(羅馬書第六章自第十九節至第二十一節)

【九五】 爾曹パリサイの人の麴酵を護めよ、これ偽善なり。それ掩はれて露はれざるものはなく、隠れて知れざるものはなし。その故になんぢら幽暗に語りしことは光明に聞ゆべし。ひそかなる部屋にて耳に附言ひしことは屋の上にひろがるべし。

(路加傳第十二章自第一節至第三節)

【九六】 兄弟よ、我いま律法を知れる者に言はん。律法は人の生命の限りその主たるを知らざる乎、夫ある女は律法の爲に夫の生けるあひだ、それに繋がるれど、夫死なばその律法より釋さる。されば夫の生けるうちに外の人に行かば淫婦と稱ふべし。若し夫死なばその律法より釋さるるが故に、人に行くとも淫婦にはあらず。然れば我が兄弟よ、なんぢらもキリストの身によりて律法について殺されしものなり。(羅馬書第七章自第一節至第三節)

【九七】 爾曹の誇るは宜ろしからず、少しの麴酵その塊をみな脹らすを知らざる

乎。なんぢらは麴醉なきが如き者なれば、古き麴醉を除きて新しき塊となるべし。それ我等の逾越。すなはちキリストは既にほふられ給へり。されば我等古き麴醉を用ゐず、また悪しきと暴戾の麴醉を用ゐず、眞實と誠なる種無き麴醉を用ゐて節を守るべし。(哥林多前書第五章自第六節至第八節)

【九八】 爾曹今よりのち異邦人の如く、その心のよこしまなるに任せて行ふべからず。かれら心昏き者なり、また知るところ無きによりかたくななるによりて神の生に遠ざかれり。彼等は恥を知らず、好みて總ての汚を行はん爲に己を放蕩にわたせり。されど爾曹は斯くの如く行はん爲にキリストを學べるにあらず、爾曹かれに聞きかれの教を受けて、イエスにある眞理を知りしならん。なんぢら先に習へる古き人、すなはち人を惑はす慾のために破らるるものを脱ぎ、また爾曹の心の靈を新にし、神に象りて眞理の正しきと清きに造れる新しき人を着るべし。斯くて謊言を棄て、おのおのその隣り眞を言ふべし。そはわれら互に戢なればなり。

【九九】 爾曹諸の事、すなはち信仰と、詞と、知識と、すべての勉勵および我等に向ふ愛心に富める如く、その恵にも富むべし。我かくいふは爾曹に命ずるにあらず、されど外の人勵むによりてなり。また爾曹の愛の眞を試みんが爲なり。

(以弗所書第四章自第十七節至第二十五節)

(哥林多後書第八章自第七節至第八節)

【一〇〇】 主の僕は争ふべからず、やはらかに總ての人をあしらひ、教へをよくし忍ぶことをなし。逆らふ者をば柔和を以て戒むべし。神あるひは彼等に悔ひ改むる心を賜ひて、之に眞理を識らしめ給はん。また彼等その醉さめて悪魔の罟を脱れいでん。そは悪魔彼等をして己の旨を行はしめん爲に之を擒にすればなり。

(提摩太後書第二章自第二十四節至第二十六節)

【一〇一】 爾曹もなほ悟らざるか、おほよそ外より人に入るるもの人を汚し能はざること知らざる乎、そはその心に入らず腹に入りて厨に落つ、すなはち食ふとこ

ろのもの清まれり。又言ひけるは、人より出づるものはこれ人を穢す、人の心より出づるものは悪念、姦淫、苟合、兇殺、盜竊、貪婪、惡徳、詭譎、好色、嫉妬、謗讟、驕傲、狂妄なり、これらの悪しきことはみな内より出でて人を穢すものなり。

(馬可傳第七章自第十八節至第二十三節)

【一〇二】 愛は偽ること勿れ。悪は憎み、善は親み。兄弟の愛をもてたがひに愛し、禮儀を以て相譲り、勤めて惰らず、心を熱くして主に仕へ、望みて喜び患難に耐へ祈を恒にし聖徒の乏しきを賑はし、旅人を懇にせよ。

(羅馬書第十二章自第九節至第十三節)

【一〇三】 キリストとペリアルと何の合ふことかあらん。信者と不信者と何の干ることかあらん。神の宮と偶像と何の同じきことかあらん。それ爾曹は活ける神の宮なり。神嘗て我かれらの中に宿りまた歩まん。我かれらの神となり、彼等わが民とならんと言ひ給ひしが如く、また爾曹彼等の中より出でて、これを離れ汚穢に捫る

こと勿れ。(哥林多後書第六章自第十五節至第十八節)

【一〇四】 神の旨はなんぢらの清きこと即ち姦淫をせず、各自の器を得てこれを清く貴くなして用ふることを知り。神の知らざる異邦人の如く。情慾をほしいままにせず、またこの事について兄弟を欺き、かつ害せざらんことを求め給ふ。

(帖撒羅尼迦前書第四章自第三節至第六節)

【一〇五】 人々とその弟子を共に呼びて彼等に云ひけるは、若し我に従はんと思ふ者は、己を棄てその十字架を負ひて我に従へ、そは生命を全ふせんとする者は之を失ひ、我ため、また福音のために生命を失ふ者はこれを得べければなり。

(馬可傳第八章自第三十四節至第三十五節)

【一〇六】 爾曹を害ふ者を祝し、これを祝して詛ふべからず、喜ぶ者と共に喜び、悲む者と共に悲むべし。あひたがひに心を同じうし、高き思ひをなさず。かへりて低きにつけよ、また自らを慧しとする勿れ、悪をもて悪に報ゆる勿れ、人々の善し

とするとところを心に留めて之をなし、爲し得べきところは力を盡して人々と睦み親むべし。(羅馬書第十二章自第十四節至第十八節)

【二〇七】 神は今日野に在て、明日爐に投入らるる草をも如此よそはせ給へば、況して爾曹をや、嗚呼信仰薄き者よ。(馬太傳六の三十)

【二〇八】 我を憐みたまへ。神よ我を憐みたまへ。我が靈魂は汝を避所とす。我れ禍害の過ぎ去るまでは汝の翼のかげを避所とせん。(詩篇五十七の一)

【二〇九】 我が靈魂よ、汝なんぞうなたるゝや、何ぞ我がうちに思ひみだるゝや、汝ち神を俟ち望め、我れ尙わがかほの助けなる我神をほめたゝうべければなり。(詩篇四十二の十一)

【二一〇】 神は爾曹が先に聖徒に事へ、今も尙これに事る其功勞と聖名の爲に現し其の愛を忘るる不義なる者に非ず。(希伯來書六の十)

【二一一】 神は我等の避所なり、力なり、艱めるときの最ちかき助けなり。されば

たとひ地は變り、山は海の中央に移るとも我等は恐れじ。(詩篇四十六の十二)

【二一二】 願くば我儕の中に行ふ能力に循ひて、我儕の求むるところ、思ふ所よりも甚く過れる事を行得る者に、キリスト、イエスに依り教會の中にて世々窮なく榮を歸せんことを。(以弗所書三の二十、二十一)

【二一三】 爾曹正しからざる者の神の國を嗣ぐことを得ざるを知らざるか爾曹みづから欺く勿れ、すべて淫を行ひ、または偶像を拜み、または姦淫をなし、または男娼となり、または男色を行ひ、または竊み、または貪り、または酒に酔ひ、または罵り、または奪ふ者などは、皆神の國を嗣ぐことを得ざるなり。

(哥林多前書第六章自第九節至第十節)

【二一四】 今よりの子供ならず、人の詭譎の手段と誘惑の巧に蕩漾さるることなく、様々の教へに動かされず、愛をもて眞理を行ひ育て、すべてのこと頭なるキリストに効はしめんためなり。彼を本とし、全體すべての節々の助によりて連り固

り、その肢體のおの分量に従ひ、働きてその軀を育てみづから愛によりて徳を建つるなり。(以弗所書第四章第十四節至第十六節)

【二一五】 みづから譽むる者あり。我儕敢て之とならび、これと較ぶることをせず。されど彼等みづからたがひに度り、みづからたがひに較ぶれば智なき者なり。

我儕は量を踰えて誇らず、唯神われらに頼ち給へしところの法の量に従ふ。われらこの量に従ひて爾曹にまで至れり。(哥林多後書第十章第十二節至第十三節)

【二一六】 愛する者よ、爾曹わが主イエスキリストの使者達の囂に語りし言を思ひ起すべし。即ち爾曹に語りていふ、末の時に嘲る者おこり、己が横逆なる慾に従ひて行かんと、我等は自ら別をなす者、また肉につける者にして靈のなき者なり。愛する者よ、爾曹その徳をいと清き信仰の上に建て、聖靈に感じて祈り、自らを守りて神の愛の中にをり、われらの主イエスキリストの限りなき生を賜ふその矜恤を待つべし。彼等のうち、ある者をば論じて口を噤ましめ、ある者をば火より取り出し

て救ひ、ある者をば畏懼を以て憐むべし。その惡は肉の慾に染みたる衣までも憎むことをせよ。(猶太書第十七節至第二十三節)

【二一七】 なんぢ誰なれば隣を議するか。われら今日明日某の町に行き、かしこに一年とゞまり、賣買して利を得んといふ者よ、なんぢら明日の事を知らず、なんぢらの生命は何ぞ、暫く現れて遂に消ゆる霧なり。なんぢらの言ふことに替へて斯くいへ、主もし許し給はゞ我儕生きてあるひはこの事あるひは彼の事を爲さんと、されど今なんぢら驕りて誇ることをなす。すべて斯くの如きは惡なり人善を行ふことを知りてそれを行はざるは罪なり。(雅各書第四章第十二節至第十七節)

【二一八】 願はくば爾曹少しく我が愚を容れよ、爾曹はもとより我を容るる者なり。われ神の熱心の如き熱心をもて爾曹を思ふ。我なんぢらを一人の夫に言付けり。これなんぢらを清き乙女としてキリストに獻げんとするなり。

(雅林多後書第十一章自第一章至第二章)

【二一九】天國は畑に隠れたる寶の如し。人みいださば之を匿し喜び歸り、その持物を悉く賣りてその畑を買ふなり。また天國は良き眞珠を求めんとする商人の如し。一つの値たかき眞珠を見出さば、その持物を悉く賣りて之を買ふなり。また天國は海に打ちて様々の魚をとる網の如し。既に盈つれば岸に曳上げ坐りてその嘉きものを器に入れ惡しきものを棄つるなり。(馬太傳第十三章自第四十四節至第四十八節)

【二二〇】わが兄弟よ、爾曹榮の主なる我等の主イエス、キリストの信仰の道を守らんには人を偏り視ること勿れ。もし人金の指輪をはめ美しき衣を着て爾曹の會堂に來り、また貧しき人汚れたる衣を着て來らんに、爾曹美しき衣を着たる人を顧みて、爾この良き所に据われと言ひ、また貧しき者に爾彼所に立てと言ひ、あるひはわが足下に据われと言はば、爾曹は各々のうち隔てを立て、また惡しき思ひを以て人を分つものにあらずや。我が愛する兄弟よ聽け、神はこの世の貧しき者を選びて信仰に富ませ、己を愛する者に約束し給ひしところの國を嗣ぐべき者とならしめ給

ふにあらずや。然るに爾曹貧しき者を卑しめたり、爾曹も虐げまた裁判所に曳く者は富める者にあらずや、彼等は爾曹が稱へらるるところの良き名を譏すものにあらずや。爾曹もし聖書に載すところの己の如く、爾の隣りを愛すべしと云へる貴き掟を守らば、その行ふところ善し、されど若し人を偏り視ることをせばこれ罪を行ふなり。法律なんぢらを定めて罪人とせん。(雅各書第二章自第一節至第九節)

【二二二】愛は忍ぶことをなし、また人の益を圖るなり。愛は妬まず、誇らず、たかぶらず、非禮を行はず、己の利を求めず、輕々しく怒らず、人の惡しきを思はず、不義を喜ばず、眞理を喜び、おほよそ事包み、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事忍ぶなり、愛はいつまでも墮つる事なし、されど豫言は廢り方言は息み知識も亦廢らん。我等の知識全からず豫言も全からず、全き者きたるときは全からざる者廢るべし。(哥林多前書第十三章自第四節至第十節)

【二二三】兄弟よ、なんぢら喜び且全くなり、且慰め且心を同じうし、且和ぐこと

をせよ。然らば愛と平安の神なんぢらと偕にあらん。なんぢら聖き接吻をもて互に相問ふべし、すべての聖徒なんぢらに安きを問へり。

(哥林多後書第十三章自第十一節至第十三節)

【一二三】 それ神の愚かは人よりも慧く、神の弱きは人よりも強し。兄弟よ、召を蒙れるなんぢらを觀よ、肉によれる智慧あるもの多からず、力ある者はおほからず貴き者多からざるなり。神は智者を愧しめんとて世の愚なる者を選び、強き者を愧しめんとて世の弱き者を選ぶ。(哥林多前書第一章自第二十五節至第二十七節)

【一二四】 なんぢら全く且備はりて缺くる所なからん、ために忍耐をして全く働かしめよ。なんぢらの内もし智慧足らざる者あらばかの咎むることなく、惜むことなくして總ての人に與ふる神に求めよ。さらば與へられん。されど疑ふことなし信じて之を求むべし。疑ふ者は風に動かされて翻る海の浪の如し。斯くの如き人は主より何物をも受くるを想ふ勿れ。斯くの如き人は二心にしてその行ふところの事す

べて定準なし、卑き兄弟はその高くせらるる事を喜樂とせよ。

(雅各書第一章自第四節至第九節)

【一二五】 人を悦ばする者の如く、たゞ眼前の事を務ることなく、誠心を以て神を畏れて従へ、爾曹何事も人に事ふるが如くせず、主に事ふる如く心より之を行ふべし。(哥羅西書三の二十二、二十三)

【一二六】 兄弟よ、爾曹よろこび且全くなり。且慰め且心を同ふし且和睦ことをせよ、然らば愛と平安の神なんぢらと偕にあらん。(哥林多後書十三の十一)

【一二七】 若し我は神を愛すと言て、其の兄弟を憎む者は是れ謊者なり。既に見るところの兄弟を愛せずして、未だ見ざる神を何で愛せん乎。(約翰一四の二十)

【一二八】 凡て事は神の旨に依りて、召れたる神を愛する者の爲に悉く働きて益をなすを我儕は知れり。(羅馬書八の二十八)

【一二九】 汝等は我を害せんと思ひたれども、神はそれを善にかはらせ、今日の如

く多の民の生命を救ふにいたらしめんと思ひたまへり。(創世記五十の二十)

【二三〇】 爾曹イエスを見ざれども之を愛し、今見ずと雖も信じて喜ぶ其の快樂は言ひ難く且つ光榮あり。(彼得前書一の八)

【二三一】 我儕の良心われらの神の賜ふ所の丹心と、信實とに由また肉の智慧に由ず、神の恩寵により世に在て行をなし、特に爾曹に向つて此の如き行を爲せりと證す、是れ我儕が誇る所なり。(哥林多後書一の十二)

【二三二】 かれら信仰に由て諸國を服し、義を行ひ約束の者を得、獅子の口を簸み火勢を消し劔の刃を避け、荏弱よりして剛強せられたり。

(希伯來書十一の三十三、三十四)

【二三三】 汝もし歩行者と共に趨て疲なば、いかで騎馬者と競はんや、汝平安なる地を恃まば、いかでヨルダンの傍の叢に居ることを得んや。(耶利米亞記十二の五)

【二三四】 凡て我儕帕子なくして、鏡に照すが如く主の榮を見、榮いや増りて其お

なし像に化る也、これ主即ち靈に由てなり。(哥林後書三の十八)

【二三五】 此故に我愛する兄弟よ、爾曹貞固して搖かず恒に勵みて主の工を務めよ蓋なんち等主に在て其行ところの、勞の徒然からざるを知らばなり。

(哥林多前書十五の五十八)

【二三六】 汝等の中にて神を恐れ、其僕の聲を聴くものは誰ぞや、暗を歩みて光を得ざるとも、神の名を頼み己の神にたよれ。(以賽亞書五十の十)

【二三七】 愛する者よ斯くの如く、神われらを愛し給へば我等も亦たがひに相愛すべし。未だ神を見し者なし我等若したがひに相愛せば、神われらの衷にをりて彼を愛する愛を我等の衷に全ふす、彼すでにその靈をもて我等に賜ふ、これによりて我等の彼にをり彼の我等にをることを知る。(約翰第一書第四章自第十一節至第十三節)

【二三八】 良き種を蒔く者は人の子なり、畑はこの世界なり、良き種はこれ天國の子供なり、稗子は悪魔の子供等なり、之を蒔く仇は悪魔なり、收穫は世の終りなり

刈る者は天の使達なり、稗子の斂めて火に焚かる如く、この世の終りに於ても斯くの如くなるべし、人の子の使者たちを遣してその國の中よりすべて蹟穢となるもの、また悪をなす人を集めて之を爐の火に投入るべし、其所にて悲み嚙がみすることあらん、この時正しき人はその父の國に於て日の如く輝かん。

(馬太傳第十三章自第三十七節至第四十三節)

【一三九】 爾曹戦と戦の噂を聞くととき懼るる勿れ、それらの事はみなあるべきなり然れども終は未だ至らず、民は起りて民を攻め國は國を攻めまたところどころに地震あり、饑饉變亂あり、それらは苦難の始なり。(馬可傳第三章自第七節至第八節)

【一四〇】 イエス弟子を顧みてひそかに言ひけるは、爾曹が見るところの事を見るその目は幸なり、我なんぢらに告げん、多くの豫言者および王もなんぢらが見るところの事を見せんとせしかども見ず、なんぢらが聞くところの事を聞かんとせしかども聞かざりき。(路加傳第三章自第二十三節至第二十四節)

【一四一】 爾もし猶太人と稱へ律法を好み、神あるを誇りその旨を知り律法を習ひて善惡を辨へ、自ら瞽者の手引暗黒に在る者の光り愚かなる者の師、童蒙の傳と思ひまた律法に於て眞理と知るべき事の式を得たりとせば、何故人を教へて自らを教へざる乎、なんぢ人に竊む勿れと勸めて自ら竊みする乎、なんぢ人に姦淫する勿れと諭して自ら姦淫する乎、なんぢ偶像を憎みて自ら宮の物を犯す乎、なんぢ律法に誇りて自ら法律を犯し神を輕しむる乎。(羅馬書第二章自第十七節至第二十三節)

【一四二】 爾曹の中に姦淫ありと常に聞ゆ、その姦淫は異邦人の中にもあらざるほどの事にて、人その父の妻を持つと聞ゆ、なんぢら誇るか、かかる事を行ひし者のなんぢらの中より黜けられんことを願ひて歎かざる乎。

(哥林多前書第五章自第一節至第二節)

【一四三】 爾この世の富める者に命せよ、驕ることなく定めなき財を恃むことなく、唯われらを樂ませんとて總ての物を豊かに賜ふ、神を好みまた善を行ひ善き事に富

み、惜みなく施濟をなして人と共にし、斯くして己の爲に善き基を蓄へ未來の備へをなすべし、これまことの生を得ん爲なり。(提摩太前書第六章自第十七節至第十九節)

【二四四】 わが兄弟よ人自ら信仰ありと言ひて若し行なくば何の益あらんや、その信仰いかで彼を救ひ得んや、若し兄弟あるひは姉妹裸體にて日用の糧に乏しからんに、爾曹のうちある人これに言ひて、安然にして往け願はくば爾曹濫かにして飽くことを得よと、而してその軀に無くてならぬ物を之に與へずば何の益あらん乎、斯くの如く信仰若し行を兼ねざる時はすなはち死ぬるなり。

(雅各書第二章自第十四節至第十七節)

【二四五】 爾曹のうち誰かその子パンを求めず石を與へんや、また魚を求めんに蛇を與へんや、さらば爾曹惡しき者ながら善き賜をその子に與ふるを知る、まして天にいます爾曹が父は求むる者に善き物を與へざらんや。

(馬太傳第七章自第九節至第十一節)

【二四六】 律法は罪なるや然らず、律法によらざれば我が罪の罪たるを識ることなし、それ律法に貪る勿れと言はざれば、我貪慾の罪たるを識らざるなり。而して罪は誠の機に乗りてわが中に様々の貪慾を起せり、律法なければ罪は死ぬものなり。(羅馬書第七章自第七節至第八節)

【二四七】 我儕は肉にありて歩けども肉に従ひて戦はず。それ我儕が戰の器は肉に屬するものにあらず、營壘を破るほど神によりて力あり、我儕は神の教へに逆ひて建てたるところのすべての櫓と、論を崩し、すべての思を擡にしてキリストに従はしむ。(哥林多後書第十章自第三節至第三節)

【二四八】 されば主にありて、囚人となれる我なんぢに勸む。なんぢら召れし召にかなへて行はんことを悉く謙遜と柔和と寛容なる心を以て行ひ、愛を以てたがひに忍べ、平和といふ繫の中に務めて靈の賜ふところの一なるを守るべし。

(以弗所書第四章自第一節至第三節)

【一四九】 なんぢら、人の義とせらるるは信仰にのみよるにあらず。行によることを知るなるべし、また妓婦ラハブ使者を受けこれを外の路より去らしめて、義とせられたるは行によるにあらずや。身もし靈魂はなるれば死ぬることく、信仰も行を離るれば死ぬるなり。(雅各書第二章自第二十四節至第二十六節)

【一五〇】 われら、神を愛すと言ひてその兄弟を憎むはこれ偽人なり。既に見るところの兄弟を愛せずして、未だ見ざる神を如何で愛せんや。神を愛する者亦その兄弟を愛すべし。その誠は我儕彼より授けられたり。

(約書第一節第四章自第二十節至第二十一節)

【一五一】 なんぢ晝餉、あるひは夕餉を設くるとき、友達、兄弟、親類、また富める隣りの人を招くなかれ。恐らくは彼等また爾を招きてその報答をなさん。なんぢ筵をなせば貧しき者、痲疾者、跛者、瞽者などを招け、さらばなんぢ幸なるべし。そは彼等は爾に報ゆること能はず、正しき人々の魅らんその時なんぢに報答あれ

ばなり。(路加傳第十四章自第十二節至第十四節)

【一五二】 人みづから驕り、無地にして議論と詞の争を好むこれによりて妬嫉、争鬭、毀謗、妄疑、また、よこしまにして真理を離れ神を敬ひて利を得んと、思ふ人の争論起るなり。なんぢら斯くの如き人に遠かるべし。

(提摩太前書第六章自第四節至第五節)

【一五三】 愛する者よ、なんぢらを試むる火の如き苦しみを、常ならぬ事の如くしてなんぢら怪しとする勿れ。却つてキリストの、苦しみにあづかるを以て歡樂とすべし、さればその榮の顯れん時、またなんぢら喜び躍らん。

(彼得前書第四章自第十二節至第十三節)

【一五四】 あ、善、且つ忠なる僕ぞ、汝寡なる事に忠なり、我なんぢに多ものを督らせん、汝の主人の歡樂に入れよ。(馬太傳二十五の二十三)

【一五五】 又我イスラエルの中に七千人を遣さん、皆その膝をバアルに跼めず、其

口を之に接ざる者なりと。(列王記略上十九の十八)

【一五六】 われら、四方より患難を受れども、窮せず詮かた盡れども望を失はず。迫害れども棄られず、跌倒るれども亡びず、(哥林多後書四の八、九)

【一五七】 神は愆と、罪に死し、ところの爾曹をも生し給へり。爾曹嘗てこの世の風俗に従ひ、かの愆と罪を行ひて日を送り、亦空中にある諸權もすべてつかさどる者、すなはち信じ従はざる者の中に今、はたらく所の靈に従へり。我等もみな嘗てその中にをり、肉の慾に従ひて日を送り、肉と心の思ふままをなし、外の人の如く生れながらにして怒の子なりき。然るに矜恤に富める神われらを愛するところの大いなる愛により、罪に死す時にすら、我等をキリストと偕に生し、(なんぢら恵によりて救はれしなり)またイエス、キリストにある我等を、彼と偕によりみがへらせ共に天の處に坐せしめ給へり。(以弗所書第二章自第一節至第六節)

【一五八】 ある司問うて言ひけるは、善き師よ限なき生を嗣ぐために我何を爲すべ

き乎。イエス彼に言ひけるは、何ぞ我を善きといふや、一人の外に善き者はなし、即ち神なり、誠は爾が知るところなり、姦淫する勿れ、殺す勿れ、竊む勿れ、偽の證を立つる勿れ、爾の父と母とを敬へ、答へけるは是皆わが幼きより守れるものなり。イエス之を聞きて言ひけるは、爾なほ一つを虧く、その持物を悉く賣りて貧しき者に施せ、さらば天に於て寶あらん。而して來り我に従へ、彼大いに富める者なりしかば、これを聞きていたく憂へたり。(路加傳第十八章自第十八節至第二十三節)

【一五九】 人あるひは問はん、死にし者いかに甦るや、如何なる體にて來るやと、愚かなる者よ、爾が播く所のもの先づ死なざれば生きず。また爾が播くところのもの、後はゆる所の體に播くにあらず、麥にても外の穀にても唯種粒のみ。然るを神は己の心に従ひて之を與へ、種毎にその各々形體を與へ給ふ。すべての肉同じ肉にあらず、人の肉あり、獸の肉あり、鳥の肉あり、魚の肉あり、天につける物の形體あり、地につける物の形體あり、天につける者の榮は地につけるものの榮に異り、

日の榮あり、月の榮あり、星の榮あり、この星とかの星とその榮また各々異り、死にし人の甦るも亦かくの如し。朽るものにて播かれ、朽たるものに甦され、尊からざるものにて播かれ、榮ある者に甦され、弱き者にて播かれ、強きものに甦され、血氣の軀にて播かれ、靈の軀に甦さるるなり。血氣の軀あり、靈の軀あり、記して始の人アダムは生命ある魂となり、終のアダムは生命を與ふる靈となることあり。如し。(哥林多前書第十五章自第三十五節至第四十五節)

【一六〇】 人々ヨハネに問ふて言ひけるは、さらば我等何を爲すべきや、答へて言ひけるは、二つの上着を持てる者は、持たぬ者に分け與へよ、食物を持てる者も亦然すべし。税吏もバプテスマを受けんとて來り言ひけるは、師よ、我等は何をなすべきか、答へて言ひけるは、定例の貢の外に多く取ること勿れ。兵卒も亦問ふて言ひけるは、我等は何を爲すべきや、答へて言ひけるは、人を脅しあるひは誣ひ訴ふることを爲す勿れ。得る所の給料を以て足れりとすべし。

(路加傳第三章自第十節至第十四節)

【一六一】 我いまだ婚姻せざる者及び寡婦に言はん。若しわが如くしてをらば、彼女等に善きなり。若し自ら抑ふる能はずば、婚姻するもよし。そは婚姻するは胸の燃るよりもまさればなり。われ婚姻せし者に命ず、妻は夫に別る勿れ。斯く命ずるは我にあらざ、即ち主なり。若し別るる事あらば嫁かざるか、または夫を和らぐことをすべし。夫も亦妻を去るべからず、その外の人に我これをいふ。主の言ふにあらず。若し兄弟不信なる妻を持てるとき、妻ともにをらんことを願はゞこれを去る勿れ。また女不信なる夫を持てるとき、夫ともにをらん事を願はゞこれを去ること勿れ。そは不信の夫は妻によりて清くなり、不信なる妻は夫によりて清くなればなり。(哥林多前書第七章自第八節至第十四節)

【一六二】 爾曹何を食ひ何を飲まんと求むる勿れ、また思ひ惑ふ勿れ。すべて是等の物は世界の邦人の求むるものなり。爾曹の父は是等の物の爾曹に無くて叶はぬ事

を知る、唯神の國を求めよ。さらば是等の物は爾曹に加へらるべし。

(路加傳第十二章自第二十九節至第三十一節)

【一六三】 イエス答へて言ひけるは、誠に實に爾に告げん。人もし新に生れずば神の國を見ること能はず。ニコデモ彼に言ひけるは、人はや老いぬれば如何で復生する事を得んや。再び母の腹に入りて生るべけんや。イエス答へけるは誠に實に爾に告げん。人は水と靈によりて生れざれば、神の國に入る事能はざるなり。肉によりて生るる者は肉なり。靈によりて生るる者は靈なり。(約翰傳第三章自第三節至第六節)

【一六四】 爾曹の中にその兄弟の間の事を鞠ぎ得る賢き者一人もなからんや。されど兄弟と兄弟相訟へ、且つこの事を不信者の前にてなせり。爾曹互に相訟ふるにより、爾曹のうち誠に過あり、爾曹何ぞそれよりも寧ろ不義を受けざるや。何ぞこれよりも寧ろ欺を受けざるや。噫爾曹不義をなし、欺をなす、兄弟にも亦これをなせり。(哥林多前書第六章自第五節至八節)

【一六五】 兄弟よ、我等主イエスキリストの名によりて爾曹に命ず。我等より受けたる傳へに従はずして、妄に歩む總ての兄弟に遠ざかるべし。爾曹自ら如何にして我等に効ふべきを知る。それ我等爾曹の中にありて妄なる事をなさず、また人のパンを價なしに食する事なく、唯人を累はせざらん爲に、勞と苦みをして夜晝工をなせり。これ我等權威なきが故にあらず、唯自らを型として爾曹をして効はしめん爲なり。(帖撒羅尼迦前書第三章自第六節至第九節)

【一六六】 爾曹慎めよ、恐らくは神の恵に及ばざるものあらん。恐らくは苦き根生へ出でて爾曹を惱さん。且多くの人之によりて穢さるべし。恐らくはエサウの如く淫を行ひ、妄なる事をなす者あらん。彼は一飯の爲に兄の業を賣れり、その後祝ふ所の幸を嗣がんことを求めたれども、終に棄てられ、涙を流して挽回さんとせしが、得ること能はざりしは爾曹の知る所なり。(希伯來書第十二章自第十五節至第十七節)

【一六七】 終に我これを言はん。爾曹みな心を同うし、たがひに思ひやり、兄弟を

愛し、憐み、へりくだり、惡を以て惡に報ゆる勿れ、話を以て話に報ゆる勿れ。却つて斯くの如き人のために幸を求むべし。そは爾曹の召されたるも幸を嗣がん爲なればなり。それ生命を愛して佳き日を送らんと思ふ者は、舌を抑へて惡を言はず、唇をとちて詭譎を言はざらんことをせよ。惡を避けて善を行ひ、和睦を求めて之を追ふべし。(彼得前書第三章第八節至第十一節)

【二六八】 萬物は爾曹の物なり、或はパウロ、或はアポロ、或はケバ、或は世界あるひは生、あるひは死、あるひは今のもの、或は後のもの、是皆な爾曹の屬なり。爾曹はキリストの屬、キリストは神の屬なり。(哥林多前書三の二十一、二十二、二十三)

【二六九】 願くば平安の神、自ら爾曹を全く潔し、又なんぢらの全靈、全生、全身を守りて我情の主キリストの臨らん時に咎なからしめ給はんことを、爾曹を召く者は誠信なる者なり、彼れ此事を成したまはん。(帖撒羅尼加全書五の二十三、二十四)

【二七〇】 汝の神エホバの汝に要め給ふ事は何ぞや。唯是れのみ、即ち汝がその神

エホバを恐れ、其の一切の道に歩み、之を愛し、心を盡し、精神を盡して神に事へ又我が汝に命ずる神の誠命と、法度とを守りて、身に福祉を得る事のみ。

(申命記十の十二、十三)

【二七一】 爾曹が遇ひし試惑は人の常ならざるはなし、神は信なるものなり。爾曹を耐忍こと能はざる試惑に遭はせし、爾曹が其試惑を耐忍ことを得ん爲に、其にそへて逃るべき途を備へ給ふべし。(哥林多前書十の十三、十四)

【二七二】 爾曹のうち大ならんと欲ふ者は、爾曹に役ふる者とならん。また爾曹のうち首たらんと欲ふ者は、凡の人の僕とならん。蓋人の子の來るも人を使ふ爲に非ず、反て人に役はれ、且ちほくの人に代り、その命を與て贖とならん爲なり。

(馬可傳十の四十三—四十五)

【二七三】 そは或は死、あるひは生、あるひは天使、あるひは執政、あるひは有能あるひは今ある者、あるひは後あらん者、あるひは高き、或は深き、また他の受造

者は、我儕を我主イエスキリストに頼る、神の愛より絶らざること能はざる者なるを我は信せり。(羅馬書八の三十八、三十九)

【二七四】 是故に、我儕かく許多の見證人に雲の如く圍れたれば、諸の重負と、圍る罪を除き、耐忍びて我儕の前に置れたる馳場を趨り、イエス、即ち信仰の先導となりて之を全成する者を望むべし。(希伯來書十二の二)

【二七五】 凡の事主を悦ばせんが爲め其意に従ひて日を送り、凡の善事に因て果を結び、且つ神を知るに因て漸に徳を増し、また神の榮の權威に循ひて賜ふ諸の能力を得て強くなり、凡の事よろこびて恒忍かつ久耐ん。(哥羅西書一の十、十一)

【二七六】 諸の恩恵を與ふる神、すなはち爾曹をして暫く苦しみを受くる後、キリストイエスに在る、窮りなき榮に入らしめんとて、爾曹を招きて神、爾曹を全うし堅くし、強して基の上に置給ふべし。(彼得全書五の十)

【二七七】 汝しらざるか、聞かざるか、主はとこしへの神、地のはての創造者にし

て倦たまふことなし、また疲れたまふことなく、其の聰明こと測りがたし。疲れたるものには力をあたへ、勢力なきものには強きを加へたまう。

(以賽亞書四十の二十八、二十九)

【二七八】 羊の大牧者なる我儕の主イエス、キリストを死より甦らしつゝ、平安の神イエス、キリストに由を其悦ぶ所を爾曹の心の中に起し、又爾曹をして其旨を行はせんが爲に、凡の善事に於て爾曹を全ふせしむべし。(希伯來書十三の二十、二十一)

【二七九】 兄弟よ、終に我これを言ん。凡そ眞實なること、凡そ敬うべきこと、凡そ公義こと、凡そ清潔こと、凡そ愛すべきこと、凡そ善稱あること、すべて何なる徳、いかなる譽にても爾曹これを念ふべし。(腓立比書四〇)

【二八〇】 愛する者よ、我儕互に相愛すべし。愛は神より出づればなり。おほよそ愛あるものは神によりて生れ、また神を識れるなり。愛なき者は神を識らず、神は即ち愛なればなり。(約翰第一書第四章自第七節至第八節)

【二八二】 我なんぢらに告げん。求めよ、然らば與へられ、尋ねよ、然らばあひ、門を叩けよ、然らば啓かるることを得ん。そはすべて求むる者は得、たづぬる者はあひ、門を叩く者は啓かるればなり。(路加傳第十一章自第九節至第十節)

【二八三】 神よ願くば我にこたへたまへ、汝の仁慈うるはしければなり。汝の憐憫は多し、我に歸り來りたまへ。(詩篇六十九の十六)

【二八四】 終に我これを言はん、爾曹みな心を同ふし、互に體恤り、兄弟を愛し憐み、惡を以て惡に報ゆる勿れ。(彼得前書三の八)

【二八五】 忠信を盡すべき事を勸むべし。此は何事を爲すにも我儕の救主なる神の教を飾る事をせん爲なり。(提多書二の十)

【二八六】 神の誠を守る者は神に居り、神も亦かれに居る、我儕その賜ふ所の靈に

由て、即ちその我儕に居給ふことを知れり。(約翰第一書三の二十四)

【二八七】 我誠を有ちて之を守る者は、即ち我を愛するなり。我を愛する者は我父に愛せられ、我も亦、之を愛して彼に自己を示すべし。(約翰傳四十の二十一)

【二八八】 汝が逐はらふ、彼の國々の民は邪法者。卜師などに聽くことをなせり。然れど汝には汝の神、エホバ、然することを許したまはず。(申命記十八の十四)

【二八九】 イエス、賽錢の箱に向ひて坐し、人々の錢を箱に入るを見たまひしに多くの富める者は多く投げ入れたり。一人の貧しき寡婦きたりて、レプタ二つを投げ入るそは四厘ほどに當れり、イエスその弟子を呼びて彼等に言ひけるは誠に我なんぢに告げん、箱に投げ入れしすべての人々よりも、この貧しき寡婦は多く投げ入れたり。そは彼等は皆その餘れる所を以て入れ、この女はその乏しきところよりその總ての持物すなはち全業を盡く入れたればなり。

(馬可傳第十二章自第四十一節至第四十四節)

【一九〇】 イエスマた人々に言ひけるは、雲の西より起るを見れば直に雨ふらんと爾曹いふ、果して然り南より風ふかば暑からんと爾曹いふ、果して然り、偽善者よ、天地の色象を別つことを知りてこの時を別ち能はざる何ぞや。また何ぞ自ら公義を審めざるか。(路加傳第十二章自第五十四節至第五十七節)

【一九一】 兄弟よ、我さきに爾曹に語れるとき靈につける者に語るが如くする能はず、唯肉につける者の如く、亦キリストに在る赤子に語る如くせり、われ爾曹に乳を哺しめて堅き物を與へざりき、爾曹食ふこと能はざればなり。今も猶あたはず、そは爾曹なほ肉につける者なればなり。なんぢの中に嫉妬と紛争あり、これなんぢら肉につきて人の如く行にあらずや。(哥林多前書第三章自第一節至第三節)

【一九二】 施濟をなす時、人の崇を得んために會堂や巷にて偽善者の如く菰を己が前に吹かしむる勿れ、我まことに爾曹に告げん。彼等は既にその報償を得たり、なんぢ施濟をするとき右の手のなすことを左の手に知らする勿れ、かくするはその施

濟の隠れんが爲なり。(馬太傳第六章自第二節第四節)

【一九三】 その頃あつたりたる者の中に、ピラトがガラリヤ人の血をその供物に雜し事をイエスに告ぐる者あり、イエス答へて彼等に言ひけるは、爾曹このガラリヤ人は斯くの如く惱まされし故に、すべてのガラリヤ人よりも勝りて罪ある者と思ふや。我なんぢらに告げん。然らず、爾曹悔改めずば皆おなじく亡さるべし。

(路加傳第十三章自第一節至第三節)

【一九四】 人律法を悉く守るとも、若しその一つに躓かばこれすべてを犯すなり。それ姦淫する勿れと言へる者また殺すなかれと言はば、爾曹姦淫せずとも、若し殺すことをせば律法を犯す者となるなり。なんぢら語ること行ふこと、自由の律法によりて、鞫を受けんとする者の如くすべし。(雅各書第二章自第十節至第十二節)

【一九五】 この石信ずるなんぢらには貴き物となり、信せざる者には工師に棄てられて隅の親石となれる石となり。また躓く石、妨ぐる岩となるなり。彼等は詞を信

せざるによりて之に躓く、こは彼等かく定められたるなり。

(彼得前書第二章自第七節至第八節)

【一九六】 我は眞の葡萄の樹、わが父は農夫なり。我にありて總て實を結ばざる枝は父これを切り取り、すべて實を結ぶ枝は之を清む、そは増々繁く實を結ばしめん爲なり。今なんぢら我言ひし詞によりて清くなれり、なんぢら我にをれさらば我また爾曹にをらん、枝もし葡萄の樹に連らざれば自ら實を結ぶこと能はず、爾曹も我に連らざれば亦斯くの如くならん。我は葡萄の樹なんぢらはその枝なり、人もし我に居りわれ亦かれにをらば多くの實を結ぶべし。そは若し爾曹われを離る、時は何事もなし能はざればなり。人もし我にをらざれば、離れたる枝の如く外に棄てられて枯るるなり、人これを集め火に投入れて焚くべし。(約翰傳第十五章自第一節至第六節)

【一九七】 禍なるかな、彼等はカイレの途にゆき利の爲にバラムの迷謬に馳せ、またコラの逆ひし如くして亡びたり。彼等は爾曹の愛の筵席の磐なり、憚るところ

なく共にその筵席に與りて自らを養へり。彼等は風に追はるる雨なき雲、枯れてまた根を抜かるゝ果のなき秋の樹、その穢を湧きいだす海の荒き浪、道をはなれたる星なり、之が爲に暗黒を限りなく留め置かれたり。(猶太書自第十一節至第十三節)

【一九八】 天國は人畑に善き種を蒔くに似たり。人々の寝ねたるうちにその仇きたり、麥の中に稗子を播きて去れり、苗はえいで、實りたるとき稗子も現れたり。主人の下部きたりて言ひけるは、主よ、畑には善き種を蒔かざりしが、如何にして稗子あるか。下部に言ひけるは、仇人これをなせり、下部主人に言ひけるは、然らば我儕ゆきて之を抜きあつむるは宜きか、否、おそらくは爾曹、稗子を抜きあつめんとて麥をも共に抜くべし。收穫まで二つながら育て置け、我かりいれの時まづ稗子を抜きあつめて焚かん爲に、之を束ね麥をば我が倉に收めよと、刈る者に言はん。

(馬太傳第十三章自第二十四節至第三十節)

【一九九】 汝の荷を神に委ねよ、さらば汝を支たまはん。正しき人の動かさるゝ事

を常にゆるし給ふまじ。(詩篇五十五の二十二)

【二〇〇】願くば、神なんぢを恵み汝を守りたまへ、願くば神その面をもて汝を照らし、汝を憐みたまへ、願くば神その面を擧て汝を顧み、汝に平安を賜へ。
(民数記略六の二十四より二十六)

【二〇一】神よ、なんぢ我に答へたまふ、我なんぢをよべり願くば汝の耳を傾けて我陳る所をきき給へ。(詩篇十七の六)

【二〇二】爾曹おのれを愛する者を愛するは何の報償かあらん。税吏も然せざらんや。安否を兄弟にのみ問ふは人より何の優れたる事かあらん、税吏も然せざらんや。この故に天にいます爾曹の父の全きが如く、爾曹も全くすべし。
(馬太傳第五章自第四十六節至第四十八節)

【二〇三】人々平和無事なりと言はんとき、亡滅忽ちに來らん。姪める婦女にその劬勞の來る如くなるべし。人々絶えて避くることを得じ。されど兄弟よ。爾曹幽暗

に居らざれば、その日盜人が來る如く爾曹に來ることなし。

(帖撒羅尼迦前書第五章自第三節至第四節)

【二〇四】我は光をつくり、又くらさを創造す、我は平和をつくり、また禍害を創造す、我は神なり、我すべて是等の事をなすなり。(以賽亞書四十五の七)

【二〇五】汝が、神に悦ばるゝ者と爲んことを務、また恥る所なき工人となりて眞道を正しく願ち、教んことを務むべし。(提摩太後書二の十五)

【二〇六】汝が水中を過るとき我ともにあらん。河の中を過るときは水なんぢの上にあふれじ。汝が火の中を行くとき焚るゝことなく、火焰もまた燃つかじ。
(以賽亞書四十三の二)

【二〇七】かたくなにして心と耳に割禮を受けざる者よ、爾曹常に聖靈に逆ひ、その先祖たちの如く爾曹もなすなり。爾曹の先祖達はいづれの豫言者をか惱まさざりし、彼等は正しき者の來らんことを豫め語りし者を殺し、爾曹は今その正しき者を

渡し且これを殺すものとなれり。(使徒行傳第七章自第五十一節至第五十二節)

【二〇八】 爾曹も暗かりしが今主にありて光れり、光の子供の如く行ふべし。そは光の結ぶところの果は、すべての善き事と正しき事と誠實の中にあればなり、主の喜ぶところを辨へて之を行ふべし。なんぢら果を結ばざる暗き業に與する事なく反つて之を責むべく、彼等の蔭にて行ふところの事は之を言ふだにも愧づべき事なり、すべて責を受くべき事は光によりて顯るゝなり。そは總てを顯すものは光なればなり、この故に言へる詞あり、「寝ねたる者よ目を醒し死より起きよ、キリスト爾を照さん、されば爾曹謹みて行を堅くすべし。賢からざる者の如くせず、賢き者の如くし、機を窺ふべし、これ時悪しければなり。この故に愚かなる者となることなく、主の旨は如何にと悟るべし。(以弗所書第五章自第八節至第十七節)

【二〇九】 兄弟よ、我なんぢらが左のことを知らざるを好まず、それ我等の先祖は皆雲の下にあり、みな海を通り、みな雲と海にてパテスマを受けてモーセにつけ

り、みな同じく靈の食物を食し、みな同じく靈の飲物を飲めり、これ彼等に從へる靈の磐より飲みたるなり。その磐はすなはちキリストなり、されど彼等の中おほくは、神の心に適はざるが故に野にて滅されたり。(哥林多前書第十章自第一節至第五節)

【二一〇】 爾曹はいかに思ふや、ある人二人の子ありしが、兄に來りて言ひけるは子よ今日わが葡萄酒に行きて働け、答へて否と言ひしが後悔いて往きたり。また弟にも前の如く言ひけるに、答へて君よ我往くべしと言ひしが遂に往かざりき。この二人の者いづれが父の旨に從ひし、彼等言ひけるは兄なり。イエス彼等に言ひけるはまことに爾曹に告げん。税吏および遊女は、爾曹より先に神の國に入るべし。

(馬太傳第二十一章自第二十八節至第三十一節)

【二一一】 一つの罪より罪せらるゝ事の總ての人に及びし如く一つの義より義とせられ、生命を得る事も總ての人に及びべし。それ一人の逆によりて多くの罪人とせられし如く、一人の順によりて多く義とせらるべし。律法を立つるは罪を増さん爲な

り。されども罪の増す所には恵も彌増せり。(羅馬書第五章自第十七節至第二十節)

【二二二】 爾曹、我に書き送りし事については、男の女に觸れざるを善とす。されど淫行を免るゝ爲に人各々その妻を持ち、女も各々その夫を持つべし。夫はその分を妻になすべし。妻はまた夫に然すべし。妻は自らその身を司る事を得ず、夫これを司る、斯くの如く夫も自らその身を司る事を得ず、妻これを司る、相共に拒むこと勿れ。(哥林多前書第七章自第一節至第五節)

【二二三】 妻なる者よ、主に従ふが如く己の夫に従ふべし。そはキリスト教會の頭なるが如く、夫は妻の頭なればなり、キリストは身の救主なり。されば教會のキリストに従ふが如く、妻も總てのこと夫に従ふべし。夫なる者よ、キリストの教會を愛し、その爲に己を捨て給ひし如く、爾曹も妻を愛すべし。彼己を捨てしは、水の洗を以て詞によりて教會を清め、これを聖なるものとせんが爲なり。また汚點なく、皺なく、總て斯くの如き類なく、聖にして瑾なき榮なる教會を、自ら己の前に建て

ん爲なり。斯くの如く、夫その妻を己の身となして愛すべし。妻を愛する者は己を愛するなり。己の身を憎む者は曾てある事なし。是を守り養ふことキリストの教會を守り養ふが如し。我等は彼が身の肢なり。彼が肉より出で彼が骨より出でたり、このゆゑに人は父と母を離れ、その妻に添ひ二つの者一體となるべし。この奥儀は大いなり、わが言ふ所はキリストと教會を指すなり。爾曹も各々その妻を己の身となして愛すべし、妻もその夫を敬ふべし。(以弗所書第五章自第二十二節至第三十三節)

【二二四】 爾曹の受くる火の如き苦痛を、異常の事として怪むこと勿れ。寧ろ基督の苦痛に與るを以て歡樂とすべし。(彼得前書四の十二、十三)

【二二五】 常に喜ぶべし、絶へず祈るべし、凡ての事に於て感謝すべし。之れ基督に由て爾曹に要め給ふ神の旨なり。(帖撒羅尼迦前書五の十六、十八)

【二二六】 年少き者も勞れて倦み、壯なる者も衰へおとろふ、然はあれど神と俟望むものは新たなる力を得ん。(以賽亞書四十の三十、三十一)

【二二七】 それ播者は教へを蒔くなり、詞の蒔かれて路の傍に落ちしものは人詞を聞きしとき、直にサタン來りてその心に蒔かれたる詞を奪ひ取るなり。また磧地に蒔かれたるものは人詞を聞きしとき、直に喜びて之を受く、されども己に根なきが故に暫時のみ。後道のために患難あるひは迫害に遇ふときは、忽ち礙く者なり。また棘の中に蒔かれたるものは、人詞を聴けども、この世の心つかひと寶の惑、また様々の情欲いり來りて、詞を塞ぐにより終に實を結ばざるものなり。善き地に蒔かれたるものは、人詞を聴きて之をうけ、あるひは三十倍、あるひは六十倍、あるひは百倍の實を結ぶものなり。(馬可傳第四章自第十四節至第二十節)

【二二八】 妻なる者よ、その夫に従ふべし。これは主にある者の爲すべき事なり。夫なる者よ、その妻を愛すべし。苦を以て之をあしらふ勿れ。子たる者よ、爾曹すべての事二親に従ふべし、これ主の喜び給ふ處なり。父なる者よ、爾曹の子を怒らする勿れ。恐らくはその氣餒るん。僕なる者よ、すべてのこと肉體につける主人に

従ふべし。誠の心を以て神を畏れて従へ、なんぢら何事も人に仕ふるが如くせず、主に仕ふる如く心より之を行ふべし。そは爾曹は主より報賞たる嗣業を受くることを知る者なればなり。(哥羅西書第三章自第十八節至第二十三節)

【二一九】 それ衣食あらば、之をもて足れりとすべし。富まんことを欲する者は患難と罟、また人を滅亡と沈淪に溺らすところの愚にして害あるさまさまの慾に陥るなり。財を慕ふはもろもろの悪しき事の根なり。ある人これを慕ひ迷ひて信仰の道を離れ、多くの苦害をもて自ら己を刺せり。(提摩太前書第六章自第八節至第十章)

【二二〇】 我儕の互に相愛すべきは、爾曹の始より聞きし處の命令なり。カインに倣ふこと勿れ。彼はかの悪しき者より出でし者にて、その弟を殺せり。何故これを殺せしか、己の行ひしところは悪しく、弟の行ひし處は正しかりしによる。

(約翰第一書第三節自第十一節至第十二節)

【二二一】 なんぢ自ら我は富み且豊かになり、乏しきところなしと言ひて實は惱め

るもの、憐れむべきもの、また貧しく替ひ裸體なるを知らざれば、われ爾に勸めん
なんぢ富をなさんために我より火に焼きたる金を買ひ、また己の裸體の恥のあらは
れざらん爲に白き衣を買ひて纏へ、また見ることを得んために目薬を買ひて目に塗
れ。(約翰默示録書三節自第十七節至第十八節)

【二三三】 神の國は如何になぞらへ、何の譬へを以て之を喩へん、一粒の芥種のご
とし、之を地に蒔く時はよろづの種より小さけれど既に蒔きて生え出づればよろづ
の野菜よりは大きく、且巨なる枝を出して、空の鳥その蔭に棲むほどになるなり。

(馬可傳第四節自第三十節至第三十二節)

【二三三】 人を議すること勿れ、さらば爾曹も議せられず。人を罪すること勿れ、
さらば爾曹も罪せられず。人を怨せ、さらば爾曹も怨ざるべし。人に與へよ、さら
ば爾曹も與へらるべし。彼等量をよくして推し入れ、ゆすり入れ、溢るるまでにし
て爾曹の懐に入れん、爾曹量る處のその量にて、また人に量らるべし。

(路加傳第六節自第三十七節至第三十八節)

【二三四】 それ肉の行は顯著なり、即ち苟合、汚穢、好色、偶像に仕ふること、巫
術、仇恨、争闘、妬忌、忿怒、分争、結黨、異端、娼妓、兇殺、醉酒、放蕩などの
如し、これらの事につき、我嘗て爾曹に斯かることをなす者は、神の國を嗣ぐべか
らずと告げしその如く、今また豫じめ之を告ぐ、靈を結ぶところの果は仁愛、喜樂
平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、樽節かくの如き類を禁ずる律法はある事な
し。(加拉太書第五節第十九節至第二十三節)

【二三五】 兄弟よ、我儕なんぢらに勸む、妄なる者を傲め、氣餒者を慰め、弱き
者を扶け、すべての人に向ひて忍ぶべし、なんぢら慎みて惡を以て惡に報ゆること
なく、常にたがひに善を追ひ、またすべての人にも善を及ぼすべし。常に喜ぶべし
絶えず祈るべし。すべてのこと感謝すべし。(帖撒羅尼迦前書第五節自第十四節第十八節)

【二三六】 清き人にはすべての物きよく、汚れたる人と不信者には一つとして清き

物なし。既に彼等の心と良心ともに汚れたり。彼等自ら神を識ると語れどもその行ひは之に逆る、彼等は惡むべき者なり、従はざる者なり。すべての善き事はとりて棄つべきものなり。(提多書第二節自第十五節至第十六節)

【三二七】 バビロンよ、爾の中に琴をひき、樂を奏し、笛をふき、箏を鳴らす、聲重ねて聞えず、様々の工人重ねて見えず、磨の音重ねて聞えず、燈の光かさねて輝らず、花婿花嫁の聲かさねて聞えざるべし。そは爾曹の中の商人は地の貴き者なればなり。また萬國の民なんちの魔術に惑されたればなり。

(約翰默示錄第十八章自第二十二節至第二十三節)

【三二八】 富める者よ、爾曹既に來らんとする禍害を思ひて哭き叫ぶべし。爾曹の財は朽ち爾曹の衣は蠶ひ、爾曹の金銀は錆び腐れり。この錆證を爲して爾曹を攻め且火の如く爾曹の肉を蝕はん。爾曹この末の日にありて、猶寶を蓄ふることをせり。視よ、爾曹がその田を刈らせし雇人に與へざる値は叫び、その刈りし者の呼聲は既

に萬軍の主の耳に入れり、なんぢら地にありて奢り、樂み屠らるゝ日にありて尙その心を喜ばせり。なんぢら正しき者を罪に定め、且これを殺せり、彼なんぢらを禦がざりき。(雅各書第五章自第一節至第六節)

【三二九】 我兄弟よ、主および、その大いなる力によりて強くなるべし。爾曹惡魔の奸計を禦がんがために神の武具を以て裝ふべし、我儕は血肉と戦ふにあらず。政治、また權威、またこの世の幽暗を宰る者、また天の所にある惡の靈と戦ふなり。この故に神の武具を取るべし。それ惡しき日に遇ひて仇を防ぎ總ての事を成就して立たんためなり。なんぢら立つに誠を帶として腰に結び、正しきを胸當として胸に當て、穩かなる福音の備を靴として足に履き、この外信仰の楯を取るべし。この楯をもて悉く惡しき者の火箭を消すことを得ん。(以弗所書第六章自第十節至第十六節)

【三三〇】 兄弟よ、若しはからずも過に陷る者あらば爾曹のうち靈に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし。また自らをも顧みよ。恐らくは爾誘はるることあ

らん。なんぢら互の勞を負へ、斯くしてこそキリストの律法を全ふすべし。

(加拉太書第六章自第一節至第二節)

【二三二】人もし有ることなくして自ら有りとせば、是みづから欺くなり。各各そのなすところを考へ視よ、斯くせば誇る基は己にあつて人にあらず、そは人おのその荷を負ふべければなり。されど道を教へらるる者は、道を教ふる者にすべて有益なる物を分け與ふべし。(加拉太書第六章自第三節至第六節)

【二三三】すべて善き樹は善き果を結び、悪しき樹は悪しき果を結び。善き樹は悪しき果を結ばず、悪しき樹は善き果を結ぶこと能はざるなり。おほよそ善き果を結ばざる樹は、切られて火に投げ入れられる、この故にその果によりて之を知るべし。(馬太傳第七章自第十七節至第二十節)

【二三四】善なる者は我すなはちわが肉に居らざるを知る。そは願ふ所われにあれども善を行ふことを得ざればなり。わが願ふところの善は之を行はず、反つて願は

ざるところの惡は之を行へり、若しわれ願はざるところを行ふ時は、之を行ふ者は我にあらず、我に居るところの罪なり。この故に我善を行はんと思ふ時に、惡の我にをるこの一の法あるを覺ゆ、そは我うちなる人に就いては神の律法を樂めども、わが肢體の外の法ありて我心の法と戦ひ、我を虜にして我肢體の中にをる罪の法に従はずを悟れり。噫われ惱める人なるかな、この死の體より我を救はん者は誰ぞや。

(羅馬書第七章自第十八節至第二十四節)

【二三五】爾曹の中の戦闘と競争は何處より來りしや、爾曹の百體の中に戦ふ處の慾より來りしにあらずや。爾曹貪れども得ず、殺すことをし嫉むことをすれども得ること能はず。爾曹競争と戦闘せり、爾曹は求めざるによりて得ざるなり。なんぢら求めてなほ得ざるは、爾曹慾のために費さんとして妄に求むるが故なり。姦淫を行ふ男女よ、爾曹世を友とするは神に仇するなるを知らざらんや。世の友とならん事を思ふ者は神の仇なり。(雅各書第四章自第一節至第四節)

【二三五】假令われもろもろの人の詞、および天使の詞を語るとも、若し愛なくば鳴銅や響く鉞の如し。假令われ豫言するの力あり、又すべての奥儀とすべての學術に達し、また山を移すほどなるすべての信仰ありと雖も、若し愛なくば數ふるに足らぬものなり。假令われ我がすべての持物を施し、また焚かる爲に我が軀を與ふるとも若し愛なくば我に益なし。(哥林多前書第十三章自第一節至第三節)

【二三六】兄弟よ、我なんぢらに新らしき誠を書き贈るにあらず、即ち始より爾曹の持てる古き誠なり。この古き誠は始より爾曹が聞きしところの詞なり。されど我が爾曹に書き贈るところは、また新らしき誠なり。この言は彼に於ても爾曹に於ても眞理なり。そはいま暗昧はやや過ぎて眞の光照ればなり。

(約翰第一節第二章自第七節至第八節)

【二三七】ユダヤ人は休徴を乞ひ、ギリシヤ人は智慧を覓む、我等は十字架につけられしキリストを宣傳ふ。即ちこれはユダヤ人には礙く者、ギリシヤ人には愚かな

るものなり。されど召されたる者には、ユダヤ人にも、ギリシヤ人にも、キリストは神の力、また神の智慧なり。(哥林多前書第一章自第二十二節至第二十四節)

【二三八】われ爾曹に姦淫を行ふ者と偕に交る勿れと、既に書き送れり。されどこの世の淫を行ふ者、または貪る者、または奪ふ者、また偶像を拜む者、交ること全く禁ずるにはあらず、若し然らば爾曹は世を離れざるべからず、我なんぢに書き送りしは兄弟と稱ふる者、もし淫を行ひまたは貪り、または偶像を拜み、または罵り、または酒に酔ひ、または奪ふことをせば、之と共に交ることなく、斯かる者と共に食することだに、爲ざらしめんとてなり。(哥林多前書第五章自第九節至第十一節)

【二三九】すべて疲れたる者、また重きを負へる者は我に來れ、我なんぢらを休ません。我は心柔和にしてへりくだる者なれば、我が軀を負ひて我に習へ、なんぢら心に安きを得べし。そはわが軀は易く、わが荷は輕ければなり。

(馬太傳第十一章自第二十八節至第三十節)

【二四〇】己人にせられんとする事は、また人にもその如くせよ。己を愛する者を愛するは何の報ひあらんや、悪人にも己を愛する者は愛するなり。己に善をなす者に善をなすは何の報ひあらんや、悪人もまた斯くの如くなすなり。爾曹返さるることを得んと思ふ人に貸すは何の報ひあらんや、悪人もその如く返しを得んとて亦悪人に貸すなり。爾曹仇を愛し、また善をなし何をも望まずして貸與へよ、さらばその報は大いなり、且いと高き者の子とならん。それ高き者は恩を忘るる者及惡しき者にまで恵を施せばなり。其故に爾曹の父の憐憫の如くまた憐憫をなすべし。

(路加傳第六章自第三十一節至第三十六節)

【二四一】なんぢら知らずや、馳場に走る者は皆走れども褒美を得る者は唯一人なるを、なんぢらも得ん爲に走るべし、すべて勝を争ふ者は何事をも控へ謹むなり。彼等は破れ易き冠を得んが爲に之を行ひ、我等は破れざる冠を得んが爲に之を行ふなり。されば我が走るは目當なきが如きにあらず。我が戦は空を撃つが如きにあらず。

ず。己の體を撃ちて之を服せしむ、そは外の人を教へて自ら棄てられんことを恐るればなり。(哥林多前書第九章自第二十四節至第二十七節)

【二四二】子なる者よ、なんぢら主にありて兩親に従ふべし、これ正しきことなればなり、なんぢらの父母を敬ふべし。約束を加へたる誠は之を首とす、これなんぢが幸を得、また地の上に生命の長からんが爲なり。(以弗所書第六章自第一節至第三節)

【二四三】律法は正しき人の爲に設けたるに非ず、不法なる者、不敬なる者、罪惡なる者、不潔なる者、よこしまなる者、父を殺せる者、母を殺せる者、姦淫を行ふ者、男色を好む者、人を攘む者、謊を言ふ者、偽り誓ふ者、またこの外まことの教に悖ることあるが爲に設けたり。(提摩太前書第一章自第九節至第十節)

【二四四】總ての不義、惡慝、貪婪、暴恨を満す者、また妬忌、凶殺、争鬪、詭譎、刻薄を盈す者、また讒害、毀謗をなし神を怒む者、狎侮、傲慢、矜夸、機詐、父母に不孝、頑梗、背約、不情、不慈なる者、總て是等を行ふ者は死罪に當るべき神の

定を知りて猶自ら行ふのみならず、亦これを行ふ者をも喜べり。

(羅馬書第一章自第二十九節至第三十二節)

【二四五】 自ら義と思ひて人を輕むる、ある人にイエスこの譬を語れり、二人祈らんとて宮に登りしが、その一人はパリサイの人、一人は税吏なりき。パリサイの人立ちて自ら斯く祈れり、神よ我は外の人の如へ奢ひ、不義、姦淫せず、亦この税吏の如くにもあらざるを謝す、われ一週間に二度斷食し、又すべて得るものの十分の一を獻げたり。税吏は遙かに立ちて天をも仰ぎ見ず、その胸を拊ちて神よ、罪人なる我を憐み給へと言へり。我爾曹に告げん、この人はかの人よりは義とせられて家に歸りたり。それ總て自らを高むる者は卑られ、自らをへりくだる者はあげらるべし。(路加傳第十八章自第九節至第十四節)

【二四六】 汝神の豊かなる恵と、寛容なると、忍び給ふことを藐視するか、その恵はなんぢを悔改めに導くなるを知らず、剛愎にして悔なきの心に從ひ、己の爲に神

の怒を積みてその正しき捌きの顯れん、怒の日に及ぶなり。神は人の行に從ひて各各にその報をなすべし。耐忍びて善を行ひ榮と尊と朽ちざるとを、求むる者には限りなき生をもて報ひん、されど争をなし眞理に從はず、不義につく者には報ゆるに憤と怒と艱難辛苦とを以てす。(羅馬書第二章自第四節至第九節)

【二四七】 老人には謹慎と自ら制する事とを勧め、且信仰と愛と忍耐とに固うならんことを勸むべし。老婦にも聖潔に適ふ行をなさん事と、人を誘らず、酒を多く嗜まず、善き事を人に教ふことを勸むべし。また彼等をして若き女に夫を愛し子を愛し、自ら制し貞潔にし、家の業をなし慈悲を抱き、その夫に從ふことを教へしむべし。なんぢ何事をなすにもおのれ善き業の型とならん事を務め、教を傳ふるに眞實を以てし恭しくし、責むべき所なき正しき詞を顯はすべし。こは敵する者をして我等の惡を言ふに縁なく、自ら恥づることをなさしめんためなり。下部には己の主人に從ひ何事もなすにも之を喜ばせん事を務め、之に言ひ逆らはず、物を竊取

らず、之に忠信を盡すべき事を勸むべし。(提多書第二章自第二節至第十節)

【二四八】 イエス按られんがため、人々幼兒を連れ來りしに、弟子達これをいましめたり。イエス幼兒を呼び弟子に言ひけるは、幼兒を我に來らせよ、彼等をいましむるなかれ、神の國に在る者は斯くの如き者なり。誠になんぢらに告げん、おほよそ幼兒の如くに、神の國を受けざる者は之に入ることを得ざるなり。

(路加傳第十八章自第十五節至第十七節)

【二四九】 イエス嬰兒を呼び、かれらの中に立ちて言ひけるは、我まことに爾曹に告げん。もし改まりて嬰兒の如くならずば天國に入ることを得じ。されば凡そこの嬰兒の如く、自らへりくだる者はこれ天國に於て大いなる者なり。

(馬太傳第十八章自第二節至第四節)

【二五〇】 妻なる者よ、爾曹その夫に従ふべし。若し教へに従はざる夫あらば教へによらず、妻の行ひによりて従はん、そは爾曹の敬懼を以て清き行ひをなすを見る

によりてなり。爾曹の裝飾は髪を辨み、金を掛けまた衣を着るが如き外面の裝飾にあらず、たゞ心の内の隠れたる人、すなはち壞ることなき柔和恬靜なる靈を以て裝飾とすべし。この靈の裝飾は神の前にて價貴きものなり。

(彼得前書第三章自第一節至第四節)

【二五一】 爾曹のうち賢くして敏きものは誰なるや、柔和なる智慧を以て善き行ひを彰すべし、されど若し爾曹心の中に苦き嫉と、念争を懷かばこれ眞理に背くなり。眞理に背きて誇る勿れ、また詐る勿れ、かかる智慧は上より下るにあらず地につけるもの、情欲につけるもの、惡魔につけるものなり。彼は娼嫉と念争のあるところには、亂と様々の惡しき業とあればなり。されど上よりの智慧に第一に清く、次に平和寛容柔順かつ矜恤と善き果みち、人を偏り視ず、また偽りなきものなり。義の果は平和を行ふ者の平和を以て蒔くによりて結ぶなり。

(雅各書第三節自第十三節至第十八節)

【二五二】 それ我儕が受くる暫くの輕き苦みは極めて大いなる限りなき、重き榮を我儕に得しむるなり。我儕が顧る所は見ゆる所のものにあらざ、見えざる所のものなり、**それは見ゆる所のものは暫くにして、見えざるものは限りなければなり。**

(哥林多後書第四章第十七節至第十八節)

【二五三】 兄弟よ、終に我これを言はん、おほよそ眞實なること、おほよそ敬ふべき事、おほよそ正しき事、おほよそ潔き事、おほよそ愛すべき事、おほよそ善き聞えある事、すべて如何なる徳、如何なる譽にても爾曹これを念ふべし。なんぢら我より學びしところ受けしところ聞きしところ、見しところを皆おこなへ、さらば平安の神なんぢらと偕ならん。(腓立比書第四章第八節至第九節)

【二五四】 爾曹いかに思ふや、人もし百匹の羊あらんに、その一匹まよはゞ、九十丸を山に置きゆきて迷ひし一つを尋ねざる乎。若したづねて、之に遇はゞ我まことに爾曹に告げん、迷はざる九十九の者よりも猶その一つを喜ばん。

【二五五】 神の國は人種を地に蒔くが如し、日夜起臥する中に種はえいでて育てども、その然る故を知らず。それ地は自ら實を結ぶものにして初には苗、次に穂いで穂の中に熟したる穀を結ぶ、既に實れば刈時至るによりて、直に鎌を入れさするなり。(馬可傳第四章第二十六節至第二十九節)

(馬太傳第十八章第十二節至第十三節)

【二五六】 イエス橄欖山に住けり、夜の明くる頃また聖殿に入りけるが、民みな彼に來りければ坐りて彼等に教ふ、爰に姦淫をなせるとき捉へられし婦女ありけるが學者とバリサイの人これをイエスの許に連れ來り群集の中に置き言ひけるは、師よこの婦女は姦淫を爲しをる時、その捉へられし者なり。斯くの如き者を石にて擊殺すべしと、モーセ律法の中に命じたり汝は如何に言ふや、斯く言へるはイエスナ試みて訴への種を引き出さんと思へるなり。イエス身を屈め指にて地にも書けり、彼等が頻りに問ふにより、イエス起きて言ひけるは爾曹のうち罪なき者まづ彼女を

石にて撃つべしと言ひ、また身を屈めて地にも書けり。彼等これを聞きてその良心に責められ年寄をはじめ、若き者まで一人一人に出で往き唯イエス一人残る婦女は群集の中に立てり。イエス起きて婦女に言ひけるは、婦女よ爾を訴へし者は何所へ往きしや、汝の罪を定むる者なき乎。婦女言ひけるは主よ誰もなし。イエス彼女に言ひけるは我も汝の罪を定めず、再び罪を犯す勿れ。(約翰傳第八章第一節至第十一節)

(哥林多後書第九章第七節)

【二五八】 その時イエス答へて言ひけるは、天地の主なる父よ、この事を賢き者、さとき者に隠して幼児に顯したまふを謝す。父よ、然りそれ斯くの如きは聖旨に適へるなり。(馬太傳第十一章自第二十五節至第二十六節)

【二五九】 ある一人言ひけるは主よ、爾に従はん、まづ行きて家の者に別を告げる

ことを許せ。イエス言ひけるは、手を鞆に着けて後を顧る者は神の國にかなはずる者なり。(路加傳書九章自第六十一節至第六十二節)

【二六〇】 爾曹が遭ひし試惑は人の常ならざるはなし、神はまことなるものなり。爾曹が耐へ忍ぶこと能はざる試惑に遭はせじ、爾曹がその試惑を耐へ忍ぶ事を得ん爲に、それに添へて逃るべき途を備へたまふべし。(哥林多前書第十章第十三節)

【二六一】 爾曹若し人の罪を許さば、天にいます爾曹の父も亦、爾曹を許し給はんされど若し人の罪を許さずば、爾曹の父も爾曹の罪を許し給はざるべし。

(馬太傳書六章自第十四節至第十五節)

【二六二】 それ靈なくして事を出すもの、あるひは笛、あるひは琴、若しその音分ちなくば吹くところ弾くところを如何で知り得んや。若し竽定りなば音を出さば誰か戦ひの備をなさんや。斯くの如く爾曹も舌を以て明ならざる詞を出さば、如何で語る所の事を知り得んや、これ爾曹空氣に語るなり。世の中の聲の類おほしと雖

も一つとして、その義あらざるなし。この故に若しわれその聲の義を知らざれば語る者に對して我夷となり。語る者また我に對して夷となるなり。

(哥林多前書第十四章自第七節至第十一節)

【二六三】 下部なる者よ、キリストに従ふごとく恐れをのきまことの心をもて肉體につける主人に従ふべし。人を喜ばする者の如く、唯眼の前の事を務むること勿れ。(以弗所書第六章自第五節至第六節)

【二六四】 主人なる者よ、なんぢらも亦かくの如く彼等に行ひて嚇すことを止めよ。そは彼等となんぢらの主天にあり。彼は偏るところなしと、なんぢら知ればなり。

(以弗所書第六章第九節)

【二六五】 人みづから相みて後、そのパンを食しその杯を飲むべし。よろしきに適はずして、飲食する者はその飲食によりてみづから審判を招くなり。

(哥林多前書第十一章第二十八節自第二十九節)

【二六六】 なんぢら慎むべし。恐らくはキリストに従はず、人の傳へと世の小學に従ひ空言なる理學をもて、なんぢらの心を奪はん、それ神のみち足れる徳は悉く形體をなしてキリストに住めり。(哥羅西書第二章自第八節至第九節)

【二六七】 光あるうちに歩いて暗きに追付かれざるやうにせよ、暗きに歩く者はそに行くべき方を知らず、なんぢら光の子となすべきために光のあるうちに光を信ぜよ。(約翰傳第十二章自第三十五節至第三十六節)

【二六八】 兄弟よ、爾曹たがひに怨むこと勿れ、恐らくは罪に定められん、視よ擧さする者門の前に立てり、兄弟よ、なんぢら主の名によりて語りし豫言者を苦と禦との式とすべし。(雅各書第五章自第九節至第十節)

【二六九】 謹め、守れなんぢら仇なる惡魔、吼ゆる獅子の如く偏行りて吞むべき者を探ね、なんぢら信仰を堅くして之を禦げ、そはなんぢら世にある兄弟の同じく、この苦みを受くるを知らばなり。(彼得前書第五章自第八節至第九節)

【二七〇】 爾いとけなき時の慾を避けて義と、信と、愛を追ひ求め、また清き心に主を呼者と和ぐことを追ひ求むべし。愚なる無學なる辯論を避くべし、そは之より争競の起るを知らばなり。(提摩太後書第二章自第二十二節至第二十三節)

【二七一】 されば善なるもの、我を死なしむるか、然らず、死なしむるものは罪なり。罪は善なるものをもて我を死なしむれば、その罪たること顯れ、また誠によりて罪の甚しきことは現るるなり。(羅馬書第七章第十三節)

【二七二】 それ詞を聞くのみにして之を行はざる者は、鏡に向ひて生れつきの顔を見る人に似たり。かれ己を照し觀て去り、のち直にその如何なる相貌なりしかを忘る。(雅各書第一章第二十三節至第二十四節)

【二七三】 それ土屨その上に降れる雨を吸ひ込みて、耕す者の爲になるべき野菜を生ぜば、神よ 恵を受く、されど荆棘と蒺藜を生ぜば棄てられ、且詛に近くその果は焚かるべし。(希伯來書第六章第七節至第八節)

【二七四】 誠の主意は愛なり、即ち清き心と善き良心と 偽なき信仰より出づ、ある人これを棄て、空しき論に移り律法の教師とならんとして却つて、その語るところその定め言ふところの事を自ら知らず。(提摩太前書第一章自第五節至第七節)

【二七五】 イエス答へて言ひけるは、すべてこの水を飲む者はまた渴かん、されど我が與ふる水を飲む者は限りなく渴くことなし。且わが與ふる水はその中にて泉となり、湧き出で、限りなき生に至るべし。(約翰傳第四章自第十三節至第十四節)

【二七六】 おほよそ人、その妻を出さんとせば之に離縁狀を與ふべし、されど我なんぢらに告げん。姦淫の故ならでその妻を出す者はこれに姦淫なさしむるなり。(馬太傳第五章自第三十一節至第三十二節)

【二七七】 外にある者を捌くことは何ぞ、我に與からん、なんぢらが捌くところは内のものにあらずや、外にあるものは神これを捌く、かかる悪しき人は之をなんぢの中より黜くべし。(馬太傳第十一章自第二十八節至第三十節)

【二七八】若しそれ律法によるもの世繼たることを得ば、信仰も空しく約束も亦廢るべし。そは怒を來らすものは律法なり、律法なくば犯すこともあることなし。

(羅馬書第四章自第十四節至第十五節)

【二七九】子なる者よ、なんぢら主にありて兩親に従ふべし、これ正しき事なればなり。なんぢらの父母を敬ふべし。約束を加へたる誠は之を首とす、これなんぢが幸を得、また地の上に生命の長からんが爲なり。(以弗所書第六章自第一節至第三節)

【二八〇】されば、我等強き者は強からざる者の懦弱を負ひて、己の心に喜ばざるをも爲すべきなり。我等ちの隣の徳を建てんために善をもて之を喜ばすべし。

(羅馬書第十五章自第一節至第二節)

【二八一】この言を言へる時、群集の中よりある女聲を揚げて言ひけるは、爾を孕みし腹と爾の哺ひし乳は幸なり。イエス答へけるは然り、されど神の詞を聽きてそれを守る者の幸にはしからず。(路加傳第十一章自第二十七節至第二十八節)

【二八二】我等が救ひを得るは望によれり、されど望を見れば亦望なし。既に見るところのものは如何で猶これを望まんや。若しわれら未だ見ざるものを望まば、忍んでこれを待つべし。(羅馬書第八章自第二十四節至第二十五節)

【二八三】なんぢら愛せらるる子供の如く神に倣ふべし。また愛を以て行ひ、キリストの我等を愛し我等に代りて己を供物となし、犠牲となして神の前に馨しき香あらしめんとて献げ給ひしが如くすべし。(以弗所書第五章自第一節至第二節)

【二八四】なんぢら勤めて信仰に徳を加へ、徳に知識を加へ、知識に擲節を加へ、擲節に忍耐を加へ、忍耐に敬虔を加へ、敬虔に兄弟の睦を加へ、兄弟の睦に愛を加ふべし。(彼得後書第一章第五節至第七節)

【二八五】なんぢら知らざるか、聖き事を務むる者は宮の物を食し、祭壇に事ふる者は祭壇と共にその頰ちを取ることを、斯くの如く主、福音を宣べ傳ふる者は福音によつて過さんことを定め給へり。(哥林多書前第九章自第十三節至第十四節)

【二八六】 爾曹パリサイの人、椀と皿の外を清くす、されど爾曹うちは貪慾と惡にて満てり、愚なる者よ、外を造りし者はまた内をも造らざりしや。

(路加傳第十一章自第三十九節至第四十節)

【二八七】 イエス又その弟子に言ひけるは、ある富める人に番頭ありけるが、主の持物を費ししとして主人に訴へらる、主人番頭を呼びて言ひけるは、爾に就てわが聞ききたる事は何ぞや。最早爾を番頭となし得ざればその扱ひたる事柄を我に述べよ、番頭自ら思へるは主人わが役目を奪ひなば何を爲さん、われ鋤を執るには力なく、施しを乞ふには恥しし、われ役目を取られん時は是等の家に迎へらるる仕方を知れりとして、遂に主人の負債人を悉く呼びて、その初めの者に言ひけるは、爾わが主に負債何程あるや。答へて言ふ、油百斗なり、彼に言ひけるは爾の書付を取急ぎ坐して五十と書けよ、また一人に言ひけるは爾は負債何程あるや、答へて言ふ、小麦百斛なり、彼に言ひけるは、爾の書付を取りて八十と書けよ、主人その仕業の巧なるによつてこの不義なる番頭を褒めたり。それこの世の子供等は、この世に於ては光の子供等よりも尤も巧なり。(路加傳第十六章自第一節至第八節)

【二八八】 小事に正しき者は大事にも正しく、小事に正しからざる者は大事にも正しからず、故に若しなんぢら不義の寶に忠しからずば、誰か眞の寶をなんぢらに預けんや、なんぢら若し人の物に不義ならば、誰かなんぢらの物をなんぢらに與へんや。(路加傳第十六章自第十節至第十二節)

【二八九】 我は汝の憐憫を喜び樂まん、汝我が艱難をかへりみ、我が靈魂の不幸を知り我を仇の手に閉込めしめ給はず、我足を廣き處に立て給へばなり。

(詩篇三十一の七)

【二九〇】 我が力なる神よ、我が救主なる神よ、我が口の辭我が心の思念をして、汝の前に悦ばるることを得せしめ給へ。(詩篇十九の十四)

【二九一】 我儕に慈愛を與へたる、我儕に永遠の安慰と善き希望を與へたる、我儕

の主キリスト及び、我儕の父なる神は、爾曹の心を慰め、且つ善言と善行に爾曹を堅めたまはん。(帖撒羅尼迦後二の六十七)

【二九二】 夜すでにふけて日近付けり。故に我儕暗昧の業を棄て、光明の甲を着るべし、行を正しくして晝あゆむ如くすべし。倒徹醉酒、また奸淫好色、また争闘嫉妬に歩むこと勿れ。(羅馬傳十三章自第十二節第十三節)

【二九三】 口より出づるものは心より出づ、これ人を汚すものなり。そは心より出づる所の惡念、凶殺、姦淫、苟合、盜竊、妄證、謗讟これらは人を汚すものなり。されども手を洗はずして食ふは人を汚さず。(馬太傳十五章自第十八節第二十節)

【二九四】 新しき酒を古き革袋に盛る者あらじ、若し然せば新しき酒はその袋をはりさき漏れ出づ、かつ革袋も壞るべし。新しき酒は新しき革袋に盛るべきものぞ、斯くてこそ兩つながら保つなれ。(路加傳第五章第三十六節至第三十八節)

【二九五】 イエスその弟子に言ひけるは、誠に爾曹に告げん、富める者は天國に入

ること難し。また爾曹に告げん、富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るは却つて易し。(馬太傳第十九章自第二十三節至第二十四節)

【二九六】 人なんちの頬の右方を撃たば、亦左方の頬を向けよ。爾の上着を取らば下着をもこばまされ。總て爾に求めば之を與へ、爾の物を取らばそれをまたもとむる勿れ。(路加傳第六章自第二十九節至第三十節)

【二九七】 それ十字架の教は滅ぶる者には愚なるもの、我等救はるるものには神の力たるなり、即ち記して我智者の智を滅し、慧き者の慧きを空しくせんとあるが如し。(哥林多傳第一章自第十八節至第十九節)

【二九八】 年寄を責むること勿れ、是を父の如くし、若き者を兄弟の如くし、老いたる女を母の如くして勧め、また若き女を姉妹の如くし、これを勧むるに貞潔を盡すべし。(提摩太前書第五章自第一節至第二節)

【二九九】 もし人その兄弟の死に至らざる罪を犯すを見ば、祈りて死に至らざる罪

を犯す者に生を與ふべし。死に至る罪ありわれ是が爲に祈れと言はず、總ての不義は罪なり、されど死に至らざる罪あり。(約翰第一章第五章自第十六節至第十七節)
【三〇〇】 視よ、我なんぢらに奥儀を告げん。我等悉く眠るにはあらず、我等皆をはりの籐の鳴らんととき忽ち瞬く間に化せん、そは籐ならんとき死にし人よみがへりて朽ず、我等もまた化すべければなり。(哥林多前書第十五章自第五十一節至第五十二節)
【三〇一】 禍なるかな、なんぢらバリサイの人よ、食堂の高座、町の挨拶を好め禍なるかな、それなんぢらは隠れたる墓の如し。その上を歩く人々これを知らざるなり、(路加傳第十一章自第四十三節至第四十四節)

【三〇二】 キリストの詞をして爾曹の心をとめて満ち足らしめ、總ての智慧により詩と歌と靈に感じて作れる賦を以てたがひに相教へ相勤め、恵に感じて心の中に神を讚美すべし。(哥羅西書第三章第十六節)

【三〇三】 それ姦淫する勿れ、殺す勿れ、竊む勿れ、偽の證を立つる勿れ、貪る勿

れと云へる、このほか猶誠あるとも己の如くなんぢの隣を愛すべしと言へる詞の中にこもりたり。(羅馬書第十三章第九節)

【三〇四】 テモテよ、なんぢ託せられし事を守り、妄なる益なき談および知識と、偽り稱ふる辯論とを避くべし。ある人この偽りの知識に従ひて信仰を謬れり。

(提摩太前書第六章自第二十節至第二十一節)

【三〇五】 窄き門より入れよ、沈淪に至る路は廣く、その門は大いなり、これより入る者多し。命に至る路は窄くその門は少さし、その路を得るもの稀なり。

(馬太傳第七章自第十三節至第十四節)

【三〇六】 兄弟よ、忍びて主の來るを待つべし。視よ農夫地の貴き産を得るを望みて、前と後との雨を得るまで永く忍びて之を待てり。爾曹も忍べ、爾の心を堅うせよ、そは主の來り給ふこと近付けばなり。(雅各書第五章自第七節至第八節)

【三〇七】 自らを謹めよ、若し兄弟爾に罪を犯さば之を諫めよ、彼もし悔ひなば

免せ、もし一日に七度罪を爾に犯して、一日に七度爾に向ひ、われ悔ゆると言はば免すべし。(路加傳第十七章自第三節至第四節)

【三〇八】人惡に誘はるるは、己の慾に引かれていざなはるるなり。慾すでに孕みて罪を生み、罪すでに成りて死を生む。わが愛する兄弟よ、自ら欺く勿れ。

(雅各書第一章第十四節至十六節)

基督の福音 (終)

昭和十三年十月二十日 印刷
昭和十三年十月三十日 發行

(定價金壹圓也)

著者 小林善八

發行者 市川靖巳
東京市中野區小瀧町四九番地

印刷者 東京市中野區小瀧町四九番地
東京出版通信社印刷部

不許複製

發賣所

東京市中野區小瀧町四九番地
東京出版通信社
電話中野六七〇四番・振替東京八四八三八番

終

